

安楽城あらかきの伝承(三)

— 佐藤陸三さんの語り —

編 武 田 正

安楽城あらかきの伝承

— 佐藤陸三さんの語り —

編 武 田 正

安楽城の伝承(三) — 佐藤陸三さんの語り —

第一部

婆々サの炉辺語り

あらきの子守唄 あらきの子守唄(二) 簀なかせ

簀の値い 馬鹿簀話 化物退治のスッペ太郎 猿さ

嫁行た娘

五

第二部

昔、正月の子供の出番

四三

第三部

おぼこ遊ばせ唄

(安楽城の童唄・追記)

七〇

第四部

おそらとおてんきの唄

(安楽城の童唄・追記)

八八

あとがき

一一三

婆々サの炉辺語り

聒むがし

むがし話^こさ出はてくる聒^こさんは
米^こ糲三合型ばかりではない
め^こつぽう優れた智恵者も居れば
とてつもない力持ちも居る
人の難儀を救った勇者も居った
かと思えば 櫛の木ボンボで
することなす^{あこ}こと きいて顎^{あこ}が
外れそうになるのも
聒^こむかしは大人にも大変好^すかれた
語りだった

1 あらきの子守唄

昔あつたけど。長者殿の家さな、小町娘てさわがった器量の良い独り娘いけど。親達あ何じがしてそさ良え聳さづけだいまんど思て、高札立てて聳さがししたけど。

それききつけて、三国一の花聳になりだくて、近所近在は勿論、遠く町の方からも集て来る者仰山居たけつけども、ながなが難しい条件でな、問題は三つあたど。それみな解げなえじゅど駄目だて言うなで、並み大抵な問題でなえどみえでな、その高札見ただけでは皆な首かしげつけど。

先ず第一は、背戸せんどの山から大きて大っきいドンコロが転がり落ちでくつさげて、それ抱き止めれつかてだど。その山も長者の山だべ。とでつもなぐでつけえくて、そさ大傾斜おおびらなて屋敷さ続いでんださげ、こげた所とこばドンコロ転で来たごんたら大変だ。ガランガランとはずみついで家シ中まで入りこみ、一ぺんで柱の二、三本へし折れんべ。ほれば素手でうげろなて、無茶ていうもんだべじゅ。

はでさで、これだけでも大した勇氣の要るごどで、皆な鰓あけさ問えさせだふうだ
でや。んださげ往還さ立つた立札には黒山の人だかりだけつけども、まだ門ば潜
て中さ入て来て名のる者は一人も現わんなえがったど。

娘も何た人が名のて来るもんだがど、わぐわぐして覗こんでだけど。ほごさ見
るからに頼もしそうな若者が出て来たなで、あの人ならなど、心ひそめて想いこ
がったどこだど。

「なんじがして、あの方に合格してもらいたいもんだ」と思てな、声かける訳に
も行がなえさげ、こっそり心で祈ったべ。そのうち若者は群集みんなの中からひらつと
姿消して居なくなたけど。多分諦らめで帰たながな。

娘はきめえ焼やげで（氣がもめで）来たなで氣落ちづけんべど、水屋みじやさ水呑みに
まわたど。ほしたら背戸の山の下まえさ、先程さきだの若者の姿見えつちよん。多分傾斜ひら
の具合でも調べでるどこだったろ。そさ娘アこっそり近寄て植木の陰さ身を隠し
たけど。

ほん時ときだ、若者さ唄うたこ聴けて来たな。ほれまだどうも他人ひとさ悟らんえように

歌つて呉つてるみでえだけど。

へ背戸せんどの山やんまのドンコロは

紙で貼つたるドンコロで

転んで来たとして 動転するな ねんねろヤー

若者には声の主は判らなえども、唄の意味が通じたとめえて、ニッコリうなづいて山神さまさ手合あせていだけど。

さて次の問題はだな。「千刈の田圃ともての田の畔くろば一日で塗り上げられっか」て言うなだど。これまた前にもまして難問だ。千刈の田圃を独りて言うのさえ並な仕事でないのに、しかも鴉の足跡をつけないでと言うのださげ、どだい無理な話だじゅんだ。でもな、若者は首ひねる前に、先ずほの田圃は下見してみんべと思たど。長者のこんだから聞くまでもない。すぐ家の前の田圃がほれだべ（それだろ）て言うなで、其処そこ行てみたべちや。ほしたらまだ何処どこからとなく唄聞けで来たけど。

何たてふしぎだもんだ。歌う姿は見とどけらんなえども、確かに先程さきだの声だ、

それに違いない。これや神さまの御告かもしんなえどて耳傾げでねつづく（一心に）聞いたど。

へ千刈田圃の畔塗るにや

朝間に削って 昼つけで

鴉の夜上り見で撫でろ ねんねろヤー

「なるほどな、んだかんじよだ。朝仕事に先ずどんどと畔の古土ば削って行つて、昼仕事に削つた後さ泥土ば附けて行く。撫つけるのは鴉がとや（ねぐら）さ帰つてから」にすると、明日の朝までには、きつと新しい泥も乾いでんべさげて、鴉などなんぼ畔さ下りだて足跡などつかないというもんだ。よし、これで二間出来る。おどり上がるほど喜ごだんだな。

はで、もう一つは倉の戸口や小屋さ仕舞ておく鋤鍬や鎌など、農具の数を一丁も間違わなえで数ぜられつかと言うなど。普通の家と違つて、長者殿の持ちものだもの、穀倉と言つたても一つ二つじゃなえのに、宝倉、味噌倉、それさ小屋となつと作業小屋、厩舎、薪小屋などで農具仕舞ておく所も沢山あんべしな。其処

置いてんな間違なく数かぜろたて、両手をつかて十本の指ば折かつてみても、それだけで数え切れるもんでなえ。考えただけでも、こんがらがりそうなて大変なこつた。ほれでも建物だけでも見でみんべと思もて、屋敷もぐるつとまわてみだどこだど。ほしたらまだまだ唄うた聞きけで来たけど。

へ一丁と二丁なら 三丁だべな

三丁と七丁で 十丁だべな

十丁ずつ十なら 百丁だべな ねろねろヤー

「成程な、お陰で悟たちや」。建物ばめぐて歩ぐうち、雨うち越すどて、ドッコイシヨと声でも立てようもんなら気が移うつてしまて、今まで数えてきた数ば忘わすつでしまて大変だ。まだ一から数え直すたて楽でなくなる。それを物どか場所どかさ、きまりつけで区切て数えで行くど、そうまごつかなえで良ええ。例え途中で違ちがつたにしても振出までは戻らなえで済むじゅもんださげな。

「これあ良よえこと聞いたぞ。これで三つ皆な出来る。良よしきたり」て言うなで、いよいよ玄関から堂々と名のり出たどこだど。

ほして長者殿の前さ出はたべ。親戚達、出入頭や鍬頭だの山廻だのて、やがて先立する人達の沢山並だどこで問答あったべちや。でも先程の唄でちゃんと解げっさげ、びくともしなえで答えだんだ。なや。そしたら長者殿が美し事出来たどて、扇子開いで伸上げだけど。

これで若者も三国一の花簪さまに選ばって、小町娘とめでたくそいとげだべ。やがてにやな、めんごげだ子供も生ってなや、一期幸せに暮したけど。どんぺからんこ なえけど。

安楽城に吹き溜った古謡の中から、この唄と民話をみつけ、「あらきの子守唄」と銘うったのが一九五五年。他にも約百二十編ほどの童唄と共にガリ版に刷ったのが初め。これがもとでNHKから数回にわたって「安楽城民謡・童唄調査団」が派遣。武田忠一郎氏の手で採譜、日本放送協会編東北民謡集山形県編（昭和三十五年発行）には百五十編から掲載された。また昭和三十二年には未来社みちのくの民謡第二集にも載る。一方、昭和二十七年十一月大蔵省主催の全国

こども銀行指導者研究協議がこの地で催された際に地元資料として全国からのお客さまに紹介したところ大好評を得た。以来県下で何か全国大会如き催しがあると、いつもガリ版刷が請われるのが恒例となり、県の名物のようになった。

2 あらきの子守唄（二）

古老としよりの言うにや、昔、江戸時代末期のことだったべて、この郷むらの或る素封家かねもちで娘さ賀がとつて後継にしんべて云う家あたけど。でもその娘まだ家の若勢と良え仲になてあつたふうだちやや。それでも身分が違うどて親に許さんなえで一緒にしてもらえなくて、この世ば果敢むで心中してしまたけど。

当時そのころそれが瓦版になつたり、口説節なになてうだわつたりして世間の語草になたふうだったど。でもそれを流布ながしたごぜ達たみでえな旅芸人達も気がさすとめえで、この郷さ一足踏み入れつとこの心中事件さは一言も口にふれなかつたじゅごんだ。

でも、人の噂も七十五日とか、郷では珍しい大変事おおごとだったなで、今までの聳取話もそれをほのめかすように作り変えらつて、語りつがれた向きもある。それじゆな。

昔あつてな。或所の長者さ、器量の良え独り娘居だけど。親達も何とかして良え家とから釣り合のつた相手ば探して授けて、後ば継へだえもんだて言うなで、や・っ・き（けんめい）なてっけど。

でも娘まだとつくに良え仲の男居だなだけど。「松明は足元が暗い」て言うたもんだ。親達としては娘ど自分家わあの若勢どの仲が出来つたな知らなえがつたふうだちやや。ほのうち、娘の腹も大きくなて、おぼこも生つたべ。

ほんでも親達は許して一つにしてやる気がなえなだど。ほして若勢あにどこ憎くてだど、二人の仲ば引き離れたえどごだろ。今までどはがらつと変えて、若勢あにどさ仕事でも何でも難しいごどばり言いづけんだけど。

今日は何た難題吹っかげつかて、親達相談してんべ。娘あそれを嗅ぎ出すと、若勢あにの味方なてな、直ぐ背中のおぼこさ歌てきかへる振りして若勢さきけるよう

に歌うなだけど。

へ 背戸の山のドンコロは

落ちて来たたて 動転するな

中は洞だぞ 紙張子 ねろかるやーど

「裏の山から大きい丸太が転り落ちて来ても避げて逃げることはなえ、紙張子の丸太ださげて、ハッシと抱きとめろ。んでないど、また何かと言われっさげて」だど。こつちで我慢すれば済むべさげ、何とかしてと手合せて拝むけど。惨えでやはな。

何時かもな、「千刈の田圃の畔ば一日で塗り上げろ」どて、まだ難題かげらったけど。若勢も困てしまたろ。千刈て言えば、なんぼ良え田だて七段歩がら余分あんべ。ほれ「一日仕事で畔塗り出がへっか」てよ。並なことでは出来っこないど思てな。早ぐあねこが知恵かして呉んねがど聞耳立ったど。ホラ、何時もこ知らぬ振りして子守唄歌て告げて呉れ呉れしたろ。やっぱり聞けて来たじょん。

へ 千刈田圃の畔塗るにや

朝間に削って 昼附けで

鴉の夜上り 見で撫でろ ねろねろやーど

「前面めえつかたの千刈せんて言た田圃たんぼの畔はたば塗ぬる時にや、午前ひのめえにどんどと削くって行いって、午後ひるがらは泥土どろば附つけで、夕方ばんかたしめえなて鴉からあとや、さ帰かえたどこ見みでがら撫なでろ」て教おんなだど。
これなら鴉からの足跡あしあともつぐまい。てつきりうまぐ行いたろ。

とにかく、どげた難題なんだいもちこまっても、力合ちからあせで切り拔ひげんべ。ほのうちおぼこがおがて、爺婆おやばさたごつくよになたら、親達おやも折おれで許ゆるして呉くれんなえべがじよんでな。ほれまでの辛棒からぼうださげ我慢がまんしんべて言いたけど。我慢がまんするどこは我慢がまんしてよぐつとめたもんださげ、やがてにや良ええぐわえにおさまて一期幸いきさいせにくらしたけど。どんぺからんこ なえけど。

3 聾 泣 が せ

昔あつたけど。或所さ、聾いびりば（か）りしてる意地の悪い婆さま居だけど。
自分の腹ばいだめだ娘の大事な聾だて云うな、聾のしたごとで言うど、何でも彼
でも氣にくわねくては。何時も難題ばふっかけて、つかがんなで、嫁こもただ
ひしやまして（あきれて）見てっけど。

或時、^{あつぎ}こよう事もあたど。聾あ山さ稼ぎ行て、「あえこ」（ミヤマイラクサ）^{えつば}沢山
出つたな見つけでな。「これあ婆さまの好物だ。何時か他家で^{よそ}馳走なて、大変美味
がつたどて喜で語つことあつけさげ、これ採て行たらなんぼが機嫌好えがしん
ねえ」て、^{しこたま}沢山採て背負て^{しよ}来たどこだど。

婆さまはれ見て、聾まだ土間さ^{にわ}編籠^{はじこ}下すど直ぐさま、中から引張り出すつもり
で手ばつっこんだべちゃ。生鮮の良え山菜^{いぎもの}ださげ茎さイライラじゅ棘でば沢山生
えでるじゅんだ。それ刺して「痛えちや」て叫がんで、編籠ば足蹴して既の中さ踏^ふ
んざらてやたけど。

「けぢげだ物（こんな物）採て来いて誰あ言た。人を呪うどごだが」どて、こもじゅもなえ（理不尽な）難くせついで、側の者まで困らせただけど。

せつかなや、聾あ婆さまどこ喜ばへんべと思て難儀して採て来たもの、当外つてがっかりだったべ。口惜くて堪らなくなては、悔し涙もこぼつて来てあつたろ。ほれがらじゅもの、このあえこば「聾泣がせ」て呼ぶようになたなだど。まだ余り美味くて「こげた美味物は聾なんどにや勿体なくて食へらんなえ」て、聾にやわだらねがつたなで、泣いだなで言う人もあつどもな。

それやそれどしても、婆さままだこんげに聾さ当るなじゅあ、なえしてだべ。嫁こと聾として頭ひねてみだどこだど。そこで感づいだのは「酒」でねえべがじゅごとなてな。本当は婆さまのこがする（無茶をいう）のも酒ば呑みだぐなてくつさげんねがや。女だつて（だてらに）して、何ぼ何でも自分から呑みだえじゅは氣辱しいこつた。ほれに聾どこ煙ていさげて、聾の方がら機嫌とて貰いだくて、いちめさかがんなだろてな。ほう言うごとで、今度から嫁こもこじらねえ振りしうつしよて後さ廻わて聾さ告口すつことしたど。

それて言うな、「婆さま呑みだくなたな」と、嫁こ悟たら、おぼこだます（あやす）振りして、子守唄ば歌て、賀どさ教へつことしたど。

へかっころ兵衛の嬢さま お酒大好きで

降つても照つても 何時だても

朝から晩まで 呑み続け ねろねろやーど

賀の方もそれを心得て、唄がきこえてくつと、夜上りしめえにや、「ほっか、ほっか、よしよし」てうなづいで、嫁こあ背戸の泉水のあたりさ隠しておいでくつた濁酒ば持て上てくつかつたど。

これで婆さまの腹の虫も納まり、ごがもすらなぐなたし、家ン中も大変まるぐ納またけど。 どんぺからんこ なえけど。

4 聾の値い

昔あつたけど。或時、部落会よりぎの後で茶呑話なれば、聾話で一花咲いだけど。

聾じゅ者は難儀する割にや、横座（旦那の坐る場）さ構えられる様になんなが遅くて割の合わなえじゅ話がらな。希あむえにや一生を「臍」へそで過す者もあるてだど。

「臍」じゅあ、おながの中しごろさあて、初めのうちはとでも大切なもんだども、後でや無えたても良えよなものにされる。聾も初めは大事にされつども、後になつと粗末に扱がわつて生涯横座さなの坐らせらんねで終る者さえある。そう言うなば「臍」て言うなだつけど。

んだがて思えば、こんだ「馬飼う前の牛」うしだ。これまだな、どう言うごとがと言うど、後継童ち小ちやこいなで稼ぎ手欲しくて、姉娘さ聾とて家さ置く約束だつた。ほれでも、男童子おがつとどうしても親達の氣も変て来る。腹痛めた子の方がめんごく、ほさかがりだくなるもんだべな。そうすりや、娘聾達の後継のごどは破談なて、こつちが分家出してもらうことになる。してみつど、聾は長男が

おがるまでの働き手だったわけで、値の高い馬を飼う前に安上がりに牛飼で済せる例えだどこだ。髻とすればどっちしたって割合わなえ話で、とにかく米粃三合持つてんなら髻になど行くもんでないちゆことなんながな。

米粃三合価しかなないと云えば一方ではまた異論も出る。それで言うなはだな、米糠三合あれば、それがとれる玄米だつてかなりあつたさげだろ。ほれあつたらば、苦勞の多い髻えなんど行くことあんめえてだど。そしたら隣さ坐た上の家の兄さが言うにやだぜ、米粃三合て言うなはな、実は、「こぬかり三度したら髻の資格なし」、物事は失敗三度繰返すよでは髻はつとまら無えてだど。その言葉誤て「こぬか」になたなだどて言うなだど。厳しいんねが。自分髻に來た人だもんださげ肩持つどこだべ。ほしたら今度下の家の兄さだけど。この人も髻に來た人だ。なじ言たど思う。

どうが髻に來て呉んなえか。來なえばこつちから押しかげっさげて頼まつた。「來つか、こぬか、來ぬならこちらで参上」が「米粃三升」になてそれが何時の間にか枴減りして三合になつたつけど。

「来るか来なえが、来なえど、こつちから参上仕る」て言うなが。良え事言うもんだ。いづれにしても聳じゆあ辛えもんだべや。

「夏藁八束打つより聳あ辛え」どかて言うさげな。「聳は明日の仕事ば今日のうち聞いでおいで、朝間にや蓆の目の見えないうち起床働ぐもんだ」て言たもんだ。お前達どうだ。ほげた勤め出来つかな。

刀剣さ例えで言えば、聳に行て一年目は劍の峯を、二年目には腹を、三年目には刃を渡る覚悟が要るて言うんださげ、良ぐ勤め遂げたら「聳取三代続くど長者になる」て言う事になんのがなや。

この家の末子が囲炉裏の隅こさ、猫こみでえにしがみついて今までの話聞いたけつ、あてつけみでえに聞けて黙っていれなくなて話さ参加て来たけど。日頃聳へ行くのを勧めらつてっさげて、頭に來たる。ほさ「末子どうだや」ともちやげる人も居んなで、末子ぐつと息のんで言うけど。

「俺だら、観音さまのご縁日に休暇くれる家なら、どげだ所だて聳行てやる」て、言うどこだけど。

観音さまだっているいろいろあんべちや。ほのご縁日に皆みな休み貰たらば、何日働ぐごあるやは。ほれ聞いて皆は、末子は良え工面だしたとて、ホーホて囃したけじゅごんだ。どんぺからんこ なえけど。

5 馬 鹿 躰 話

昔あつたけど。或所さな、「櫛の木頭」て、賤めらつて少し智恵の足りない男いでな。これあ嫁こもらたけど。嫁この方は躰ど違て勝れ者で、躰ごば何かと庇てくつてな。ちようど三日目で二人連で里帰りしたけど。

嫁まだ躰どさ、実家では此頃家普請したばりで、行たら多分お父さまだお座敷の床柱ば自慢しつかしんなえ、誰が来てもんだなださげて。ほしたら柱の真ん中しごろさ、節穴あつさげてな、「せつかくの柱も玉に傷だ。こさ短冊掛けつとかくれる。そうさつせ」て言てみらつせ。きつと機嫌良ぐホクホクしつさげつけど。

さでど、実家おさどさ来てみだれば、初賀だじよんで持でで早速奥さ通さったど。ほして挨拶もそこそこにはお父さの床自慢始またけど。賀まだ柱ば撫でまわしで嫁この言た通り節穴見つけたじよん。すかさず教へらった通り、「短冊掛けらっせ」で言たべちゃ。ほしたらよぐ気がつぐ、「なんたら利口な賀だごど」とで、舅さま上機嫌だけど。

ほの後で「この間じゆ、新し馬飼たてたどこださげ、見てくつちや」どて自慢そうにその馬おにやこば屋外さひき出して来たけど。「牝馬ぞやくだども臀部しりこも丈夫だどこみっと、きつと荷駄つけも良えがしんね」て自慢しつけど。

馬うまごとしては褒めらつて何と思たが、尻尾上げて馬糞だんくそひてよごしたけど。ほうしつど賀あ、すかさず「此処こゝも穴あつちや、玉に傷ださげ、短冊掛けて隠すど良えげすな」て言たけべな。お父さこれ聞いて、本気で言たなだべか、おどけてだべか、見当つかないでポケンとしたけど。

こげだごとあて、暫くして正月来たじよん。まだ二人連じんばで初正月礼に行くごとにたけど。何しろ初めでだもんださげ、向うさ行たら何た事言て挨拶したら良え

もんだが工面余したけど。

本家の爺さまなら何でもおべ[・]で[・]る人ださげ聞いてみるに限るどて、訪ねて行たども、あいにくど川さ行たどごだどて留守だけど。んだら行きしめ川の方ちやまわて爺さまどこ探してよつく聞くべて、家さ一たん戻て、いろいろ仕度して出がけたふうだ。

橋の上まで来っど、爺さまちようど下前の淀の所で雑魚さらいしたじょん。賀まだそれ見つけで喜ごでな。大声張り上げて、「正月礼じゅあ何た事言て行ぐもんだ」てきいだべ。んでも川の瀬の音が強^{きつ}いなさ、爺さま年老^{としよ}て少しきつかず（聾）だもんださげて、何聞がつたがよつくど判んなえがつたべちやな。

てつきり「何ば獲たどごだ」て聞がつたかど思いこんでは、「朝から今までか^かがて、こればりよ」て、腰ささげた亀^{かつこ}籠^{かた}こを傾^{かた}げて中の雑魚ば見へつとこだけど。賀あごとしては、成る程、正月礼じゅあ亀^か籠^{かた}さげて行がなんなえものがじゅなで、家さ引返し用意整えて出直したけど。

いよいよ実家^{みと}さ着^きいで、拝頭^{はいづと}（御辞儀）して戸口入って行ぐや、「よぐ来て呉^くつ

た」どて、家中出はて来て、愛想しつちよん。そのたんび上台の所で、「朝から今までかがて、こればりよ」どて、腰ささげた亀箆こ傾げっけど。家の人達これ見で、「聾さん何だどこだべ。初聾ださげだべが」て、不思議がたべや。ほんでも余り図々面してんなで、これあ向うの風習だもんだべ。所変ればて、随分と面白ごとする所もあるもんだちゆなで、ほん時あ何事もなぐ初聾あ接待さつて帰えさつたけど。

ところで後えなつて台風吹いで嫁の実家でも大分いだみつけたことあたど。「屋敷の外郭さ植わつた梨の大樹が倒さつたさげ、後始末手伝い来て呉ろ」て、便り来たじよん。んでや何をさで置いでも動転見舞に行がなんなえて、出がけるごとしたど。

こう言う時は何た事言て行けば良えが、これまだ本家の爺さまき聞いたべちな。ほしたら先ず倒つた梨の樹は見で、「これだけの大樹めつたに見られるもんなえ、惜しいごとしあんしたなや、この樹の太い所で臼ば掘つて、細めの所では打杵作たら良んなえべが」て、そう言えて教へらつたけど。

一生懸命なて覚えて行て、先方さ着ぐなり、その通り述べだべ。ほしたら、「んだ勘定だなや、良え工面借りだ、そうしんべ」て言うて、大変褒めらったけど。ほげだ事あた後で、姑婆さまが中風で倒ったけど。こん時は余りにわがな知らせで、動転して駆けづけだもんださげて、挨拶の言葉ば聞いて来る暇ながつたふうだ。

ほれでもこの前に、んと褒めらっただけがらと思て、同じ倒ったなだんだし、「太い所では臼掘つて、細めの所で打杵作た方良げすべ」て言てしまたけど。

こん時ばりあ、聾さんも惚の木頭の本性出してしまて、皆に呆返らつてしまたけど。どんぺからんこなえけど。

6 化物退治のスーパー太郎

昔あったけど。或所さな、長えこと独り旅ばつづけでる若者いだけど。とつて

も度胸のすわった怖え物知らずで、どげた所でもが・つて・しな（平氣）でわだり歩くなだけど。

或時な、山ン中の何年も人の住まなぐな破れ寺ささしかかたろ、晩方しめえだつたつけや。今日は此処厄介なつかな。なんぼボロでも夜露しのぐには木の下さ寝るよりましだべてだど。よぐ淋しくも怖かなぐもなえもんだ。形ばりの御堂さ入て少し具合の良え所探して、そさ横になて軀を休めだけど。

夜も深更で来つど、何だか奥の方からザワザワて言う物音近寄て来つちよんな。よつく聞耳立てでつと、いろいろの獣の声みでえだし、まだ唄のようにも聞けつけど。よぐよぐ近間で聞いだば、やつぱり唄のよだけど。

へ天狗天狗 みってんぐ

三河の国のスッペ太郎

このことちつとも聴かせんな

ピンヨロ チャンカラカ

トランコ居ねば 笛吹きアねえ

貉あ腹太鼓打って来る

狐あ燃薪振きんじりって来る

鼬あ板こを打って来る

ピーンヨロ チャンカラカ

獸達に気付がんなえように身を忍ばせて屋外おもでの庭ばすかして見だれば、「あらやは」いろいろなが寄て来て踊り出したけど。兎だかも居おもたうだけし、木鼠や鼬の小ものから狸に貉、狐なんだがも喧嘩もしなえで面白おもへそうにまわり踊りすんなだけど。ただまつと大きい奴達は木の繁みさ隠しやがまつて、面がよつくど見えなえども、屈しやがまて踊り眺めつたなだが、相談しやがまごとしてたなだか、踊りの輪さかざらなえ者もんも居だよだけど。

「待でよ、どれが大將格だがな、唄さ出る天狗あ居だがや、スッペ太郎じゅあどれだったか」、それらの顔も確かめだいもんだと思もたども、化物達に気付かつたら、一と騒動ださげ、息殺して軀を忍しのばせつたど。ほして、この踊りをなんぼ見でも圧氣来ない。きつと土産話になる時も来んべどて、ひっそりど眺め楽しんだだけ

ど。

やつと夜もチラチラ明け出すて言う頃になって、獣達もの・ごりえ（心残り）そうに奥さ帰て行ぐけつけや。若者もこげた所さ泊たなで獣踊り見るなて全く思いがけなえごとだったんだな。まわりが静がなてがら、又ぐつすり一寝入りして山下りだど。

里さ出てみつど、集落の親方株の家なんだな。沢山人だかりしつたけど。只事では無えらしぐ、近寄て様子うかがたれば、何でも人身御供養の白羽立つたじゆなで騒いでんなだけど。

此処でや、お山の神さまに白羽の矢を立てられつと、一月のうちに其処の家の娘を花嫁姿で山さ送らねばなんねて、ずっと昔から伝えらつてんなでな。今朝なたれば、ほの矢羽根がこの家の屋根さ突立つてたなで、皆、動転見舞だ何だで寄たどこだったふうだ。

まごど、其処家には身頃のめんごえ娘こ居で、今にも聳取てあづけなんねて言うてた矢先だど。ほればこの月の代らねうち、お山の峯つづき天狗の跳場まで送

はねこつば

り届けねばならなえ。なえつたて可哀想むぞさえども皆思案にくれでは沈みこんでしまい、年寄達や女衆などうろうろして泣ぐばかりだけど。

そこで若者あ昨夜ゆべなの古寺での一件思い出して、あれこれ考え合わせでみだど。何だかかわりがあるらしい。あの繁みの中さ隠つて顔見へ無い連中達が何かヒソヒソ相談したと思うど、一時姿消したり、今なて想えば、どうも可笑しいぞ。ほれさあの唄の文句だ。謎ば解ぐにはこの唄がら先きだな。

「スッペ太郎にはこの事ば聴かせんな」て言たな。そのスッペ太郎て一体何者だろ。奴等さえ一枚置く一番と怖おっかない者にちげえなえよだ。ともかくも、ほの三河の国さ行てみれば判るこつたろ。遠いたても一ト走り飛ばせば、なんぼなえでも期限までにや帰て来れんべ。そう思たけど。

ほれで其処の旦那どこ呼んで告げだど。良え智恵があつさげてまがへでもらえないが。期限までには準備を整へでちゃんと又此処こゝ来つさげ。それまではどげた事があつてもほつても（決して）娘さんを山の神だろと何だろと引渡すよなごとしなくてだど。

見ず知らずの男の言う事、なんぼ信用なつか判たことではないども、外れだてもともと、一人でも身方が現わっただけでも氣強いことだと思たる。んでや、そのつもりで居るさげよろしく頼むどて、頼りにしつけど。

さあそうなつと、若者も夜昼休まず、一駄^{いだてん}天走りで三河^{さんわ}さ来てみたど。其処^{そこ}此処^こさ当てみだれば、此方^{こつち}では有名な話で何の心配^{あせわ}なえ直ぐ判たけど。良がったな。若者もなんぼ喜^{おおいぬ}ごんだんだが。「スッペ太郎」て言うな、とっても勇氣のある、ほして力の強い猛犬^{まうぬ}で狩りの名人だつけど。

してみつと、なじが思い当る節も出て来る。スッペ太郎の名前が獣仲間ぢやそんなに響いでるどしたら、あの古寺さ集た化物達の一番怖がるなも当然のこつたと言うなで、その犬の飼主の家さ行て、今までのいきさつば一部始終話してお願^{ごん}いしたどこだべちや。

それ聞いて其処の家でも、「よしッ、貸してやる。ほう言う人助けが出来たら、このスッペ太郎もまだきつと喜ぶべ」どて、心よく承知して力かしてくれつことなただ。

さあ若者もこれで一と安心、早くスッペ太郎ども仲好になんべどて、道中も機嫌とりとり、先の里さ向たけど。余り早く着いで化物達に気付かつてても良ぐ無えなで間を取つて、ちようど期限さ間に合うくらいにどんぎまだいだけど。

其処の人達も皆な待ちだ待ちだ。来るんだが、来なえんだが、一時は素通りの旅人の言うごどなんか当になるもんかと疑つてもみたなだども、その姿を見て喜こんだの喜ば無えてありやしなえ。苦しい時の神頼み、一本の藁さだてたごつぐ氣持で頼りにしつたべな。さあいよいよその日が来たじゆんだ。何時もするやうに、娘をのせで送る金ピカの籠も用意出来つたさげ、それさばスッペ太郎どご我慢してもらて押込み、娘どこば集落の衆にも氣付がん無えやうに、こつそり蔵座敷さ隠したどこだど。

スッペ太郎ごどしては此処来る道々もよつくだ言いふぐめらつて来てんなで心よぐ籠さ入て蓋してもらて静がえしてんなだけど。いよいよ指図さつた天狗の跳場まで集落の代表達が担いで運ぶことなたる。ちゃんと若者も後さ従で行たじゆんだ。

さあ竈あ着いだ。誰も姿見せなえども、其処置いで来なんなえじゅんだ。送人達
「もう一と目見でから別れだえ」どて泣きわめぐなだけでも、竈の蓋をとらつて
は大変な事なつさげ、「却つて見つど悲しくなるばりだ」じゅなで、なだめで引返
させたけど。若者だけはこつそり皆とはぐれて、独り現場の近くさ身ば隠してな
り行き見守てたど。

日もとつぷり暮つて、すつかり暗くなてがらだんだ。抛がえ何と言うが、喧嘩
するみでえな騒々しい音聞けで来たけど。何者の強い唸り声さ、ケンケンだかキャ
ンキャンだかギヤアだか、悲鳴交え、山一面こだまして、それこそ一時は山あ割
れるよだけど。でも騒ぎは激い割にやそんま（間もなく）おさまたふうだ。

多分スッペ太郎の声だったべな。元氣あふれるワンワンて言う一声聞えて騒動
も終いのよだけど。若者どこ此処来てみろて呼ばたのだが、まだ関の声だった
かもなや。

若者あ早速寄て行て、元氣なスッペ太郎どご発見して撫でてくつたど。外傷一
つ、爪跡一つ受げて無えなで流石は三河からはるばる連れで来た甲斐あつたて、

感心したど。傍さ倒さつてのびった相手ば見つど年老た大古貉みでえだけど。この化物の最後を見どとけたなで、若者あスッペ太郎どご連れで威氣陽々と山下りだべ。

長者の家では、若しもの事あてはど、集落の衆も庭さ檜松明ばあがあがと焚いで、娘ばかぐまたお蔵を護てたどこだけど。そこさ元氣な姿をみせだもんださげて、もう後は心配無えじゅこんで皆な大喜びしたけど。お蔵がら出て来た娘さんも安心して血の氣戻したれば一段ときれいになて見えだけど。

若者も長者殿はじめ集落の衆みんながら喜こばつて、「出来らば、ずっとこのまま集落さどどまで集落を守て呉ろ」どて願われんなだけど。ほの娘と一つなたら（夫婦になつたら）きつと似合だて言うなも居だけじゅこんだ。

でも律氣な人で、借りだスッペ太郎ば返さなんねどて、の・ごり惜しがったべども、袖振り切つて三河の国さ向て立つたけど。長者殿も「ほんでは」じゅなで、娘こどこホイホイ急がへて旅仕立させ、若者とスッペ太郎の後ばぼかけさせただけど。どんぺからんこなえけど。

7 猿さ嫁行た娘

昔あつたけど。ほの年あ長え日照りつづきで、何処でも水枯れ、田圃など干いで割つてしまたじよん。

へいどし殿この穂前田が割れた

四角三角十文字に割れた

女ながらも雷さまよ

天にゴロゴロ 下にはバタリ

―て、童達まで雨乞いして呉れつつけども、一粒も降らなえけど。

或所^{あつど}さ、娘三人持た爺さま居でな。この爺さまも千刈のひやけ田持てだなで、
とつても困てたけどは。手前^{でど}の田圃^{ともで}は諦めだにしても、山田だけでもひでりから
なじが逃がったえもんだと思て、毎日ひやけ田さ出がけでは、堰さ落ちったごみ
や落葉除せだりして、奥^{いり}がら水呼んでくる工面だけど。ほれでも何処でもれるも
んやら、ちつとも水が張らなえで困たけど。

爺さま畦畔のさねこつと腰下して一服した時だど。「誰かこの田さな、水かけで呉れる人居なえんだが、居だらば、娘三人持ったさげ、そのうちどれが一人嫁に呉つても良い」て、独言こぼしたふうだちやや。

はれば誰かに聞きづけらつたらしいじよん。後の藪原からがらガサガサ出はて来て、「爺さ、爺さ、今何て言た。田さ水かけでやつと娘呉れるて言たんねが、本当だべな」て、確かめつちよん。

見だれば野猿やまのあにだべ。山中の仲間皆連れで来てみだて、しれだごと。如何して猿なんかの手で千刈さ水なのは、れんばと思たさげて、「嘘うそなどこぐもんか。なんぼ惜しい娘だて三人も居つさげ一人ぐらえ呉んなんねべ」て、言てしまたどこだど。

爺は猿どこ賤やしめで自分わ言たことなどは大した氣にもとめでなかつたふうだでや。でも次の日、山田さ行てみて動転したどお。あれ程亀裂ひびわれした田圃さ水あ満々とかがてだけど。爺さま飛び上るほど喜ごだども、ふと思ひ返すと、野猿どの約束があつたけ。未だ娘達にや何も話してない。これがらが心配あせりがさして来たじよん。家さ帰て来ても如何なして良えが踏切んねで、飯も喉通のどらなくて、寢床さ入て

布団冠てたけどは。

なえして

「野猿どなの何故ああ言う事ば約束してしまたんだが、考えつと考えるほど悔まってなん無えけど。夜が明けで朝御飯時分になつても床がら起きで来なえ、昼間なても夜間なても部屋から一足も出なえさげ、娘達まだ「寝床さ飯運ぶが」て、言たども元氣なく、ただ「要ら無え」て言うじょん。心配なて、先ず一番上の姉娘あ枕元さ来て、こっそり聞いてみだけど。

「爺さ爺さ、何処が悪いなが、悪い所あたと言えや、脚でも揉むが、それとも何が心配事でもあんながや、何でもきいでやつさげて言てみろ」て、慰めつけど。そう言わつて爺さまなんぼが力になて安心した^{どつかレ}が、「本当はな、野猿さ娘呉れるて約束してしまたなよ」て、今までのごとみな打開げで語て聞かへだけど。

「何だてや、野猿の嫁^{わけ}になれてが、なたごと^ど（如何なる事）あたて、畜生の連れなどになてられんばや。この糞たれ爺つこ」どてカンカンにごしやいで、爺さまの枕ば足蹴りして立て行たけど。爺さまがっかりして起上る元氣もなぐして、まだ布団さもぐたけど。

暫くして二番目の娘が来て、「爺さ、爺さ、なして何時までも起きねなや。起きで飯でも食たら…」て、部屋さかたがた（顔を出す）けど。そこでまた野猿と約束した事ば話したべちや。ほしたらこの娘も猿の嫁など真平だどて、あらあらしぐ戸閉て行てしまたけど。

間もなくこんどあ末娘こがニコニコて部屋さ入て来たけど。事のあらましば姉達から聞いて来たどこだんだ。「爺さ何心配しつとこや、野猿さ俺あむがさて行くさげ、元氣出して飯でも食え」でだど。そう云て閉めつばなしの雨戸ばさっさと開げ、爺さま冠た布団も剥ぎ出したけど。

爺さまこれでやつと安心出来たべ。「お前聞ぎうげで呉れんなが、良がった良がった」どて、末娘の手とつて喜ぶけど。

ほのうち野猿まだ、「爺さまどの約束ださげ、娘ば貰え来たぜ」て、顔出したけど。約束は約束だし、やんだ（嫌だ）顔も見せねで娘ば出すごとしたど。娘の方も覚悟が出来でだとめえで、氣持よく承知してくつてな。

「別に欲しい物て無えども、蕪種少し分けて呉つちや」どて、火棚さ下げったふ

くべから少し分げでたがぐ（持つ）ふうだけど。

山で焼畑耕して蒔ぐつもりだったがなや。昔から「むがさりにや蓑笠お膳」て言たもんだども、蕪種は何た因縁だもんだか、それたげえで野猿の後さくついで思いの外元気で行んけど。

娘こあ来た道わがらなぐなりそうなつど、蕪種出してパラパラとこぼしこぼししんなだけど。暗くなて夜道かけるようになっても曲角々さ種こぼすけど。何だ訳だんだがな。

山の家さ来てがら日経つなも早えもんで、忽ち冬越したけど。何だかえだて、三日月も行てない。深山の雪も消え出して山路も開げだべさげ、里帰りすることしたど。ところで爺さまちや土産に何持たら良えがして、相談したれば、大好物は餅だて言うなで、さっそく餅を搗いで背負て行ぐことしたけど。

野猿まだそれば重箱さ詰めで持ぐかんじよしつけさげ、ほれや駄目だ。重箱さ入れつと重箱臭ぐなて、ほげだ餅ば食はなえ人だ。漆の香嗅いだだけでも負げで漆あ出るくらいだ」て言うなで、勿論わっぱだて漆かけでんだし、容器は何が良

えんだがどて、とんと悩だどこだど。なや

いっそのごと、「臼がらみ持て行けば良え勘定だ」どて、重だえ臼ば荷縄かけて背負て山を下るごどなたけど。野猿も娘に嫌われつとえぐなえさげて、少しばりの無理は我慢するどごだろ。

山路ばずつと下て来つと、崖端くちの下の方ちや深つけえ溪流たにかわのあつ所どさ出たけど。景色の良え所こゝで崖ぐちのてんけつ（頂上）さ奇麗な山桜が咲いでだな見つけでな。「みごとだちやな、一枝持て行たらなんぼか爺さま喜ごぶんだがし」て娘言たなば、猿あにが聞きづけで「一枝て言わ無いで、でつちり持てあべ」どて、臼ば下して花折さかがる勘定しつけど。

娘がそれ見で、「臼ば土の上さ下すど大変だ。餅あ土臭くなつちよんで爺さま食なくなる」。それぢやて言うなで、臼を下すなば止めで、難儀でも背負たままで花折さかがつことしたけど。流石は野猿だもんだ。平気で桜の木さ上たけど。

木の上がら下まえて眺めつた娘わげこさ「何処らの枝が奇麗だんだが、よつく見で教ろよ……これどうだ」て声掛けでよこしたど。そしたら「まど（もつと）先端しんべな

のよ」て、声を返すけど。そつからまたすたこら上つて、「これが良えが」て、枝さたぐづいで聞ぐじょん。ほしつと、また「まっど先端しんぷなのよ」て張り上げつけど。段々とささ上れば上る程、樹は細くくなてしなしな揺れ出す。そのうち足かけた枝さ重みかがつて、ポキンと折れる。手でつかまった枝も欠けで、支えになくしてしまたど。

なんぼ身のきいだ野猿だとして、重だえ臼を身につけたままでは自由まきか無えがつたべちや。崖下の渕さダボンと落ちて命落したけど。可哀想むざなえごとした、落ちで行きしな、

へ猿沢に落ちるこの身はいとわねど

後に残れる姫子いたわし

て詠んで行たどごだど。

その後は娘あ独りぼっちなて、なれない山道ば下りなんなえべ。なんぼか苦労さなんなえ。道を聞ぐ相手も居なえべと思たどもな。

ほら、山ば上つ時にちゃんと勘定さ入れで蕪種ば道々こぼして来ったべでや。

それがもう芽を出したんだおんは。それば目標に山を下りだなだど。利口な女子だもんだ。

家さ辿り着いだれば、皆な末娘どこみて、夢で無えがど動転してはな。野猿にさらわつて行たも同じこと、もう帰てなの来れなえどばり思いこんでだどさ、達者な姿みせだもんださげな。ほさ後追かけてくる者も居ないと聞いて安心して喜ごんだけど。ほれがらも娘あ長えごど爺さまのそばで孝行つくしたけど。どんぺからんこなえけど。

昔、正月の子供の出番

年中行事で最も多彩なのが正月、しかも大人でも子供でも多くの出番をもつで何処の誰からも楽しみ深く待たれたものである。

「正月廿日」と言つて、こざつぱりした長着物を着て家業を休み、普段は余り口にすることもない美味い物まで食べられる。その正月を昔はと言つても、戦前までは農家ならずと陰暦で迎え、今のように陽暦の正月に足並を揃えたのは戦後で、出稼ぎ農家が多くなつてからのことであろうか。

師走の声をきくと、神々のお年越が重なり、中でその家の信仰の厚い神さまのご縁日には餅を搗くか、赤い飯を炊いて振舞う。殊に鎮守さまのお年越にはその集落ではおさいどを焚いで奉納する。子供達は各戸をまわつて藁を準備し、架稲^{はさ}長木^{ながき}など使つて大きな藁の灯明を形作る。架稲長木を新調した家では、おさいど

で使ってもらった木は腐らないし、虫もつかないと言って、何処の家でも喜んで提供してくれたものである。

この灯明を年間の月数だけ用意して、平年は十二本、閏年なら十三本雪原に立てる。日が暮れて祠に参詣に行く人達が多勢集ったところで、いよいよ点火される。

へ〇〇神さまに お灯明献げ奉る

おさいど おさいーどー

舞い上る炎に加勢するように、天にも届けとばかり競って大音声を張り上げる。賽の神の呼びこみにもなることだろう。この頃からにわかには正月近しの気分が湧いてくる。

正月事始めが師走十三日、先づ正月用の白米を搗く。発動機や電力が手搗臼にとつてかわるまで、この風習が遺っていた。その他正月を迎える準備としては障子の張替え、蓆畳の敷替えもこの間に行い、往時は煤掃も大方の家ではこの日行つたものだが、実際にはもっとせっぱ迫ってからでも遅くないというので、暮近く

にずらすようになったという。

廿五日は正月用の納豆煮で、大正月用だけでなく、小正月の年越にも、また二月の「一日正月」^{ひして}にもこの日作った納豆を使うことになっている。口開けは正月沢庵漬と同じ煤掃きの日に行ない、近所や親しい仲にお才暮に手作り納豆を配り合う。そのお使いに出された子供らが、藁苞をのし代りに松葉を附けて引きづるようにして行き交う姿は嬉々として、駄賃の貰らえた喜びがかくせない。納豆配りは子供らには楽しい正月の一頁であつた。

煤掃は後におくらせて二十七日に本家とか旦那衆に手伝い、一般の家では二十八日に行なう。早曉に起きて、まだ囲炉裏に火を焚す以前に屋根裏の清掃から始める。そして神棚の清掃は旦那の役目で、これには男子が手伝わされる。小人は狭い場所で身まわりが効くので重宝され、また持仏壇の清掃は主婦の役、こちらは女の子達が動員されて仏具の研ぎ出しなどに手伝わされる。

煤掃いを終えたら正月の餅搗きである。家によっては幾臼も、何俵餅も搗くことになる。神仏に供える鏡餅を初め、大正月中の食用餅、それに年賀用のものも

みなこ餅にとり餅にする。搗きたての餅は間を置くと風をひき易いといって、泡ぶくれないように直ぐとり餅しないといけない。ここにも子供の出番がある。千切った餅を粉をつけて大事にいたわるようにして丸める。餅肌の感触がよいよ正月近しを感じるころだろう。

へ正月ア何処まで

きりきり山のかんげまで
やんま

土産ア何々

にんじ 人参と牛蒡ごんぼの辛煎

いのまつたの切り昆布

猫まつたの串柿

誰ちや呉れつとて 突ン出した

誰某要らなえどて もんどした

やーどなえ やーどなえ

行事化された正月準備も大晦日の年越の宴に至って最高潮である。家族は大人も小人も雇人も皆な一風呂浴びて、長着物に替えて揃って年越を同席で祝うので

ある。赤い高脚の膳に木椀一式で、主従でも格差のない振舞ご馳走で、往時としては正に大したお・ご・りだったろう。お膳についた馳走は全部食べないで、きつと半分は翌元旦に残す風習であった。子供らもお膳の馳走もさることながら、小椀から胸に抱きかかえるようにしなければ持てないような大椀まで、何種類もの椀の並ぶのが嬉しさも最高である。

大晦日は一晩中戸の口の大戸を閉め切らずかしておいて歳之神のご入来を待つ。

へ正月アござる 何さのてござる

ゆずり葉さのつて ゆずりゆずりござる

その正月さまが今晚着いて、どんなことがあっても卯の日にはお帰りになる。ご自分の食扶として一斗の飯米を背負ってお出でなさるが、日に一升飯を食われるお方なので、若し卯の日の到来が遅くて滞在期日が長くなると、食いこみ立てることになる。逆に早く卯の日が巡ってくると飯米が余る勘定で、米の余るような年は上作で、不足する年は不作と占う。従って「卯の日を確かめてから若勢頼

むか決めろ」という言伝えがある。

正月中の作試しは手をかえ念入りで、この日に「月焼き」というものを行なう。おみだまを板簀に載せて祖霊さまに捧げるが、この時の敷紙を使つて行なうもので、その紙に付いたおみだまの濡れ跡を順送りに月を決める。これを炉端で火にかざし、下まえからウルキの箸に火をつけて近づけ、だんだんに焼焦して行く。その焦げ様によつて、例えば乾燥度の強い月は天候の良い日、湿の多い月は雨、または雪の多い月と占う。後でこの紙を農事暦に大黒柱のなげしに大事に貼つておいたものである。

年越祝いを済ませて、暫く団欒の時を過した後、家族動員で夜警よまわりをする。勿論男の子は員数のうちである。伝家の宝刀を取り出して腰にさし、マタギの鎗や火縄銃まで担ぎ出し、それぞれ得物を身につけた物々しさは、まるで魔物退治の絵巻さながらである。貝を吹き鳴らし、火の用心を叫び、建物の屋根屋根に杓子で手桶の水を振りかけるのは火防の呪言で、屋敷の鬼門に来る魔物払いに中空に向つて空砲を放つ。銃のない家では弓矢を作つて射る。この夜警を済したら家族

そろって運のそばで夜食を摂る。

台所のくらしも元旦から更新というので、先づ囲炉裏の火をあらため、炊事を清新する。朝に起きたら年男が囲炉裏の火を新しく起す。何時もなら残火を火種にするのであるが、この日は塩水を打って炉を清め、火打石を使って新しく起して、達者まめに暮すようにとの縁起から大豆殻に焚きつける。年男はその家の男の子で年寄の後見がついて取行なう家が多い。

次は水神を祀る泉井か、引水の根から若水を汲んでくる。手桶に縄を張り新しい柄杓をもって、

へあらたまの年の始めの玉柄杓

福汲む 米汲む 宝汲む

と唱えて汲みこむ。この若水は徳利かんすずに入れて神棚に供え、後で家族みんなで頂く。他に茶湯を沸し、また朝餉の炊飯、お汁にも使ってお祝いにする。

元日に箒を使うと、せつかく入ってきた福の神を掃出すことになると言うので、元日は箒を休める。ただ「掃き初め」といって、神座一間だけ普段とは反対に戸

口に掃き出さないで、部屋の隅から中央に掃き集めるように箒を使う家例の家がある。

へあらたまの年の始めの玉箒

万の宝掃きぞ 集むる

あるいは、

へ年の始めの玉箒 手にとる度毎

黄金を掃き込む 掃き込む

元朝は家族連れ立って鎮守さまに初詣する。先頭は俵沓を履き雪路を踏むが、大概の年は鳥居も雪に埋れ塞いてくぐれない。鳥居も積雪計みたいなもので、行き交う初詣の人たちに往時の雪の想出をたどらせ、雪話と作柄予想が挨拶の代りとなる。

参詣済ませ家に帰って賽の神さまを拝み、若水を頂き、お神酒で祝う。島台におてかけは御饌米の他に、ホシコ（乾鰯）は田作り、大豆はまめまめしく、栗は繰りまわしよく、昆布は喜ぶ、串柿は掻き込むという縁起で添え、それを一同に引い

て呉れる。

正月札の来客にも島台をはさんで挨拶を交す習いで、その時に豆を三粒引いて客に進ぜる。それを遠慮されては縁起でない。「出された豆は頂かねば…」という駄洒落はここから生れた詞だという。ともあれ元日とあれば年越の宴のみちたりた気分も後をひいて何となくさわやかさも湧いて来る。

へ正月アえんだ えんだ

あがえ着物^{かつか}しやばて 赤え魚食^{どじ}つて

油のような酒飲んで 犬齒のような餅食つて

正月アえんだ えんだ

正月二日の朝夢を初夢といつて、初夢に「一富士、二鷹、三茄子」を見ると吉兆という。子ども達はそれをあ^あば^ばけて（ふざけて）、

へ一富士、二鷹、三茄子^{なすび}、四葬列^{そうれん}、五糞――

といつて囃す。

よい初夢をみるには宝船を紙に画くか、長歌へ長き世のおのねふりの皆めざ

め、なみのり舟の音のよきかな―を書いて枕の下に敷く。或は付木で船形を作り、帆に宝の字を書き入れて枕下にして寝につくとよいとされた。ともかく初夢も子どもによりの行事だった。

へ 正月二日の真の夢に

子宝産んだる夢をみた

取り上げみれば玉のような男の子

祝いましょうや のぼり竿 のぼり竿

てまり唄である。いずれは大人の唄を小耳にはさんで童達の唄に変えたものであろうが、元唄は往時流行を極めた大津絵節のようである。

へ ながきよの ながきよの とおのねふりのみなめざめ 下から読んでもながきよの 正月二日にまさ夢をみた 宝子産んだる夢をみた 取り上げみれば玉のような男子あり 祝いましょうや上り竿 菖蒲刀やあやめ草
あアこらこら

元日から財布の口が開いてお金の出て行くのを嫌って、二日が買い初めであ

る。商店ではご祝儀にいろいろの景品を添えてくれるので、子供たちは買物の使いに出来るのが嬉しい。貰うおまけは半紙何帖とか学用品の類であつたが、一般にはきつと付木とかマツチがついた。これは先が明るいよう、そして付木の先に硫黄がついているので、「祝う」という縁起なのだという。

買物は何はさておき食塩と決っていた。商店に遠い僻すう部落などでは隣家同志相談でお銭を出し、小皿一杯ほどの食塩を交換して購ったことにするほど塩にこだわりをもったものである。

正月二日には書き初めがある。若水で墨を磨り、手に応じて芽出度い詞を選んでお習字する。和紙を長く貼り足して、詞の意味がわかろうがどうだろうが、「天筆和合樂 地福田満楽」とか、それと、

あらたまの年の始めに筆とりて

よろずの宝 書くぞあつむる 年正月一日

氏 名

年徳大善神様

これが書けたら、ともかく得意絶頂だった。これを年棚を飾った部屋のなげしに貼っておき、それを小正月のおさいとで燃やす。燃えついた紙が火勢にあふられて高く舞上るほど手書きになると喜んだものである。

正月三か日は婦女子は家を出て他家を訪ねることはしない。つまりは四日が「出はり初め」で、日頃親しくしている近所を訪ねて羽根を伸ばす。お祝いの標に門松から松の葉一片をむしり摘んで入る。甘酒でも馳走なってるうちには類は類を呼んで輪が拡がり、にぎわしく茶話が酒盛りともなりかねない。

へ唄のうたい初め 仕事のしそめ

貰た手拭の 冠りそめ

へ正月元日から 飲みそめて

二日酔い 三日ふらふら

四日よかよかと いつかこの酒

覚むるやら 覚むるやら

謡曲をたしなむ人たちは今日が謡い初めであるから、自づと女衆のうたい初め

もあつても可笑しくはなからう。この時よく女子など婆ンちゃんめごがお供する。そして耳にした唄が子供らの口に移り、やがて手まり唄やしうなご唄（お手玉唄）となつて広まった向きも多く、これもその例である。

四日は山神さまに正月礼に行く。のおさを納め、若木迎えといつて若柴や門林、梨団子、榎たたきなどの材料を迎えて来る。元気な男の子は勇んでお供する。それというのも「たらまわし」の楽しみがあるからである。榎を迎えたら一尺前後に切り揃えたのを幾本か一緒にして束ね、間に芹をはさむ。これが俵たはであり、これに松葉を添えて子供らは親戚や親しい近所にお年始に伺い、お年玉を貰う。榎は芽は七草の榎叩きに、木地は「十二月」の矢を作るのに使う。

へ一に俵を踏んまえで 二にニッコリ笑うて

三に盃ひつかえで 四つに世の中よいように

五つに泉の湧くように 六つ無病息災で

七つに何事ないように 八つ屋敷を平らめて

九つ九この倉おつ建てて 十にトント納った

こんな唄をうたつてたらをまわしたものである。数え唄式なので、てまり唄としてもてはやされた。たらまわしに行けば、お年玉がもらえて、男の子にはたまらない行事である。正月中には俵まわしと言う門付もやって来た。

へこのこのよい子のな

福俵廻しをみつさいな

一転しは千俵 二転しは二千俵

福はでつしり招ぐよう

一に俵を踏んまえで 二にニツコリ：

これは藁で作ったミニ米俵に細縄をつけて持ちこみ、どんぎから家の中に放り込んで貰い歩く大して芸のない者だったという。

この日はまた若木迎えて、若木は誰が持主だろうと伐つてよいとされた。若木で炊飯し、囲炉裏に焚いた煙に肌をかざすと無病息災、年寄は若返つて長生するといつて老若みな火に寄つて煙を軀になすつたものである。

へ爺っさ 婆っさ 若げぐなれ 若げぐなれ

炉端で暖をとる年寄の膝の上で、幼児たちが若柴を焚く火に手をかざしてほとぼりを爺さん婆さんの肌に移してやろうとする。すると年寄は、

へ野郎ッこ　まめでおがれ　おがれ

幼いうちは男女を問わず野郎こと呼ばれると丈夫に育つものだと言伝える。若木いぶしにはこんな和やかさがつきまとった。

七日の朝は七草粥を炊く。といってもこの雪の中では春の七草を用意する訳には行かない。せいぜい芹、スズナ、スズシロといったところか。他は櫨の芽、人参、栗、芋の子など、とにかく七種にして細かく刻む。

前夜のうちに揃えた材料を、起きがけに唄で調子おもしろく俎板の音をひびかせる。

へ櫨叩き　櫨叩き　千櫨たたき万櫨たたき

唐土の鳥が渡らぬさきの櫨叩き、タタン　タンタン

(唐土の鳥と田舎の鳥と渡らぬ先の櫨叩き——とも)

これを櫨叩きといっているが、年越祝いに供えたおみだまのご飯やら宇賀さま

のご馳走、これは一のヒレの年魚は後継息子に下げ、他は凡てこの七草粥に入れて煮る。余り美味しいものではないからか、焼餅を入れて餅粥にする習である。

十一日はのびらきで、田圃に堆肥を運び、野良仕事の仕初めとする。堆肥は背負い易いように前日に藁で被い束ね、また田圃への雪道も踏み堅めておく。「よて田」といつて祖先が開墾の時に一番手がけにおこしたという田で、苗びらき、虫追いなど、田の神事はみなこの田で行なう習である。深い雪の中で暗がりでも場所が判るように、前日から見極めて、煤掃ボンデンを突立てて目標にしておく。

早曉に男衆が起きて堆肥を背負って運び、それに御神酒を注いで、貝を吹き鳴らして豊作を祈る。曉の闇について遠くから近くから貝の音は先陣を競うかのようにならしく鳴り渡る。その勝負にこの年の作柄がかかるとけしかける老人も居つて、送り出した家族までが、貝の音に耳そば立て力出している始末である。

堆肥背負をした若衆には朝餉に宇賀の餅が二個ずつ引かれる。この餅は昔は円形だったという田を形どり、水口といって一寸とした凹味をつけたこ餅である。農家の男の子らはそれが魅力で、堆肥を小ぶりに束ねてもらって一行にかけても

らう。それと貝は普段は非常用具で、やたらにいじったり吹いたりするのを戒められるが、この時ばかりは存分にさわれるという望みがあったて心踊りしたことであろう。

小正月になると、農事正月といつてよいほど、豊作を祈る予祝行事が多い。先づ十五日は模擬田植で、屋敷内の雪原ほてはらに祭りの場所を定め、ケヅリカケを四隅にさし、その枠の上手に一米ほどに切った榎の木を五本つきさす。榎は米俵に通じて米の豊作を意味すると共に、木が五本ならば「森林」であつて、今で言う緑は水源を作る。榎の木の代りに水木みずきをさす家の例もある。

次に菫を七本、葭原は湿地で水の湧き出る地帯、そしたら田圃を耕し藁を挿す。これは水稻である。その続きに畑作を代表して大豆殻を挿したところで、傍に煤掃ボンテンを一本突立て、おてかけと御神酒を供えて、丘作稲作共々農作を祈つて礼拝する。この役は鋤頭となる者がつとめるが、こ・苗・ぶ・ちと称して男の子が手伝わされる。小さい時分から仕来りをすっかり身につけさせておきたい計らいだろう。

いわばこの雪中田植の済んだ頃をみはからつて部落の若衆が田植踊の門付に来る。子供達はまたそれを真似て、囲炉裏の金火箸を手にして金輪を振り鳴らしてはしゃぐ。

へウウーソオデーワエー エーエーエー

オー正ヤー ソレ月のー祝えー年でナー
門にーソレ松をば ひーきー植えーるー

へウウーソオデーワエー エーエーエー

懸^かーがアーるー白雪アーみーな黄金ー

懸ーがアーるー白雪アーみーな黄金ー

夜になつて皆床に就く前に「田草取り」行事がある。家族の中で春野に入る者みんなが手をかして囲炉裏の灰を丹念に掃除する。囲炉裏汚しておくとな田圃が荒れるといういわれがある。若しも三月に尋常科を上るよな子が居ると、女の子でもきつと田の草除りをさせられるので、眠い目をこすりながらも灰ならしを持たされる。

十六日になると、子供達は夜明けも待ち切れぬ風に、
貝を吹き鳴らし、鳥・追・い
に田植跡をまわつて来る。

へ鳥追いだ 鳥追いだ 門に門松 門林

向えの木のボッコさ こうの鳥三羽

スツパオツパ筍 綾錦つんばぐら

つんばぐらの羽根さ もち三杯ぶつからで

バツタラめえで 飛べなえ 飛べなえ

ジャエホエ ジャンジャラホエ

へ上方の鳥は 足袋履いで踊るわ

俺方の鳥は 粟稗ばりまぐらつて

い・つ・ち・憎・い・鳥・だ 簞さ入^えつで結^ゆつくらげ

佐渡島さ追つてやれ

佐渡島近がらば 鬼鳥さ追つてやれ

ジャエホエ ジャンジャラホエ

餅や蜜柑など、貰ったご祝儀を雪の穴倉で食べるのも楽しいもの。若し寝坊な仲間が居ると冷かしに、また鳥追いがどんなに早くまわって来ようとあわてないよう、ご祝儀を高窓さまに載せておいてくれる家が多いが、若しそれを忘れ、起きても来ない家があると、悪態唄が浴びせられる。

へ 太郎太郎 かがあ羽がえ冠て

起ぎで鳥追えなえ 鳥追えなえ

酒こせ餅焼げ ブーブーブー

田畑を荒すものは鳥類ばかりではない。昔は蛇も土龍も耕作に大きな害を与え、ると嫌われた。その呪も小正月十五日の行事で、

へ 豆の皮かもホガホガ よね来る 飛んで来る

長虫ア来んな 来んな

へ 豆の皮もホガホガ 長虫よげろ 土龍アもんな

夜這いども来んな 来んな

へ 豆の皮もホガホガ 亥の香もホガホガ

ヤーレクレア 飛んで来る

部落によつて、また時の移りかわりで唄は多少異つて繼れて来るようだが、豆の皮を家敷まわりや田の畔に撒らして蛇や土龍を近寄せまいとする。その豆の皮は十一日に小正月用に黄粉を挽いた時に出たのをとつておく。一方また横槌に縄をつけて引きづつて歩く。こうすると土龍も蛇もおそれて近寄れないと信じてのことである。

果樹を責めて豊熟を約束させる呪もこの月の行事で、子供の集団が雪道をつけながら成木に近づいて行くと、山刀を手にした一人が、樹皮に切り傷をつける。

へ成つか 成らなえが

成らねげば ぶった切ンぞ

と威嚇する。すると供の者がすかさず「成り申す、成り申す」と詫びながら、その傷跡に正月のマユ玉団子を煮た液をふりかけて歩く。こうすると、隔年成りの果樹も毎年稔りをみせるというのである。

ずっと昔は、この成木責めや蛇、土龍打ちなど、それぞれ別々に行なつた行事

だったかもしれないが、後で子供達の手にわたるようになってから、十五日の月明を頼りに一緒に行なう所が多くなった。小川内部落では小正月の晩に子供達は年越を家で済したら部落開祖の大本家に寄って、これらの行事を取り行なうてやり、甘酒や餅焼の馳走に預った上、古老を囲んで昔話を聴く習が続いたと言われる。成木責、土龍叩きを終えてからおさいどを焚く。この日は「かどさいど」と言つて戸毎に焚くもので、先づ藁を二束一緒に雪に立てて燃す。その裾藁の燃え具合によつて、本田植の時に植苗が不足するか、余すようになるかを占つて、播種の時に籾種を厚蒔にするか、薄蒔にするかを手加減する。占つた後は藁を足しくべて天を焦すほどに火勢を強めて、大声張りあげて景気をつける。また書始め紙を焰にかざして上達をかける。

へお祭灯 お祭灯 お祭灯のこりもり

鼻糞 眼糞 飛んで（行）げ とんでげ

お祭灯には童たちばかりでなく、大人も寄つて来て、いろいろの願いをかける。その火で温まると老人は若返り、この火で餅を焼いて食うと誰も風邪をひかない。

煙草の火をつけて喫むと齒が丈夫になる。また皮膚病にかからないというので梨団子を火にかざし、それで身をこすり、隣合せた同士が手渡して、

へひぜん　へぼかぐな　かぐな

と唱えて遠くの方へ投げ合う習もある。

空は満月である。子供達にもう一つ大役がある。眼疾いをしないようにと、家族それぞれ自分の才の数だけの雪玉を握り、往還への丁字路の傍に積み重ねてお月さまに供え、お灯明をともして拝む。子供達は年寄の分を手伝い雪玉を握ってあげ、お駄賃に預るから年寄めごの楽しみである。

また「十二の眼」といって、家族の数だけ藁ミゴで眼型を作るか、或は紙に眼を画いて廁神に奉納する。雪に閉込められ、焚火の煙でいぶされ通しの生活では、どうしても眼病、トラコマなどに患いやすい。正月を過せば、にわかに屋外の作業が多くなり、強烈な太陽光線と白雪の反射に悩まされるので、このような行事も生れたものだろう。

小正月の年越にも「水口田」と呼ぶ作試しをする。手を替え品を替えして作を

占うのも、昔の農作は殊の外天候に支配される度が酷しかった証である。これは月の数だけの藁ミゴを真中から折込んで一握りに持つ。中央をかくしてホッピキのようにして両端を家族の者に結ばせる。全部が結び終えたら手を開く。ミゴが出来るだけ広い大きい輪になっていれば上作で、小輪がザクザク重複しているようだと、水口田だといって今年是不作と占うのである。

陰暦の正月であると節分と暦日の上で重複したり、または連続する場合が多かったので、昔は節分は正月行事の一部のようにみられた。節分の夜には「福は内」と言つて豆蒔きの行事が行なわれる。明るいうちに大豆炒り、一升枥に入れて神棚に供えておく。豆を炒る時に月々の天候からその年の豊凶を占う行事がある。先づ粒の揃った大豆を十二粒、閏年なら十三粒選んで炉の灰の上に並べ、順に一月二月と定めて、それがほどの熱で焼焦げる具合をみて月々の天候を占う。つまり白く灰になる月は晴、黒く焦げる月は雨か雪、早く焼ければ旱で、息吹くような月は風などと判じたものである。

夜になると年男の男の子が明きの方（恵方）から豆を打ち始め、部屋部屋から

建物すべてを打ちまわる。

へ 福は内 鬼は外

天に花咲き 地に実が成り

鬼の眼ン玉 打つつぶれる

鬼を追い出したところで、田作の頭を焼焦したのを萩の串にはさんで魔除けとして戸や窓にさす。豆打ちは単に厄病神や悪魔を追い払うための呪だけでなく、豆の種を畑に蒔きおろすことの模範的作法であり、予祝行事の一つとして行なわれたものだったかも知れない。

正月も廿日で歳棚を片付け、お飾りを外す。ただ梨団子は二月正月を過してさらにする家が多い。この終正月は灸立日しまいといって、小皿のこじたに艾草よもぎを盛り、燃してそれで家族の身体をなでつけ、身体健固を祈る。また十能に艾草をたて大戸のしき、炉のかぎのはな、井戸の釣瓶縄、厩の矢来棒とか、日頃繁しく動き稼いでくれるものにも労をねぎらって灸を立てる。そして農家の正月休も今日切である。

二月一日は、二月正月または「一日正月^{ひしつて}」といって、もう一ど歳を迎える。暮の二十五日にねせた納豆をこの日のためにもとっておいて、正月納豆として使う。朝餉には家族に菱餅二枚ずつ引き、雑煮餅を祝う。正月に年男をつとめた者へのご祝儀はこの時出されるから、正月の決算の日のようなもので、子ども達にも楽しみな日である。

家族の中に厄年に当る者の居る家では、この日を正月後の最初の朔日、新しい元日と仮に定めて、これで厄年を去年のこととして新しい無事の年を迎えようと念入りに年祝いする。こうした家では梨団子も二月十五日まで飾っておく習である。梨団子を取外すと水木のまつか枝が沢山出るので、子ども達はそれを使つて鉤ひっぱりやベロベロ占いなど、いろいろの童戯を楽しみ、正月の名残りを惜む。年越には丸いこ餅、のびらきには田の形をなぞつたという宇賀の餅、そして一日正月には菱餅とそれぞれ変つた形のこ餅、しかも子供には独りでは一どに食べ切れない大きいのが引かれるのが何ともうれしかったものである。

「片年はとるな」といって、大小正月の年越は同じ家で迎えるように努めたも

のである。現今は大正月、小正月を長々と祝う家などのこっているだろうか。しかも出稼家庭などでは七草までも一家揃うなど珍しいこと、正月にかけた子ども達の楽しみも今はずい分と変ったことであろう。

おぼこ遊ばせ唄

へい ない ない バアー

おそらく幼児をだます（遊ばす）のに誰も最初にうたい、しかもおぼこの一番喜ぶ唄かもしれない。それにおぼこは鳴物が大好きで、アンヨもハイハイも出来ない時分から、手を拍ったり、口を鳴らしたりして、音を立ててあやすといきり立って喜ぶ。

強く舌打ちすると、タンタンと快音がとび出るが、唇を軽く閉めて、息を吹き出して唇を震わすか、肌に唇を触れて息を吹くとブーブーと振動音が出る。おぼこは歯の生え際によく独りでもやることだ。舌を唇の間から一寸だけのぞかせて横に素早く動かし、同時に息を吐き出すと、気の静まるレロレロである。このような唇や舌の操作に指を工面して使えば、いろんな擬音も出来るし楽しめる。や

がておぼこも成長して学校に上る頃になると、自分でおそぶえ（口笛）を覚える。

これは根気強く修練を積まないと上達しない。初歩のうちは周りの人達にうるさがられ、「家^え中でおそぶえ吹くど、貧乏神呼ぶ」とか「化物が来る」などと嫌われ、殊に夜の口笛は盗人の道案内だと言つて忌嫌された。また「女の子がおそぶえ吹くど、てんど悪くなる」、つまり手さき仕事の上達しないとて、女子の口笛は端ないものと強くいましめたものである。その代りか、女の子にはほおづきが与えられた。

ほおづきは種子や核を除つて上手に吹き鳴らして遊ぶだけでない。着せ替え人形にしても遊んだ。それに冬場の草花の無い時の仏さまの供花としても丁宝にされたし、乳腫らしの良薬として、また神経痛にも特効ありとして保存して用いられたものである。

だから晩秋、ほおづきの果が袋まで赤く色づく、枝がらみ採つて、その家では恰も女の子が居る標^{しるし}のようにして軒端にさげる。それでも何故か屋敷内にほおづきを植えることを忌嫌い、堰一つとんでも屋敷を外して植えろとされたもの。

ほおづきさらしと言つて、種子や核を除るのには、まず口の中に実をふくんでしめりをくれてから、手のひらで軽くもみもみをする。その時に上手に核が抜け出るようにと、お呪いを唱える。

へほんづき　ほんづき

さらさね　とれーろ　とれろ

(さらさね　うけろうけろとも)

へほんづきねっこ　つーけつけ

たねよだ　うぎろ

へほんづき　ほんづき

うんめ　うんめ

へべろべろ　カベロ

ほんづきねっこ　つーけ

からさね　つーぐな　つぐな

口で吹いて鳴らすものを、幼児語でピッピーと呼んだ。その音色は奇妙に人の

心を浮立たせ、耳に入ると、じつとして居られなくなり、何か踊り出したいくらい
の気持ちに浮かれて来る。横笛でよし、呼子よびこでよし、ピッピ―は幼児誰も憧憬を
もつちやすび（玩具）である。村祭りの時に露店をさがして一番先きに買い求
めて満足するのはピッピ―だし、小学校低学年の遠足で町に連れて行かれても、
少ない小遣いをさいてまで求めなければ心納らないのがやはりピッピ―で、とに
角、子どもには並ならぬ魅力あるおたからであつた。

野や山での自然との遊びの中にも、季節によつていろんなピッピ―を工夫した。
雪が消えたばかりの田圃の畔際に生える雀の鉄砲も手作りのピッピ―にされ、同
じ頃清流や湧水のほとりに入るいり水花は海ほおづきのように鳴らしたものである。
野蒜ひろこも二、三センチほどにもぎとつて、節をつけて吹き鳴らすとよい音を出す。

葦の葉も五ミリ程度おきに区切り、わたを除つて、これを横に両唇にはさんで吹
き、葦ハーモニカと喜び、大蒜ラッパは大蒜の葉を晒して吹くのだが、晒す際の
唱え唄は、

へとれろ とれろ 臍の緒アとれろ

同じようにして、葱の葉でもラッパが出来る。

いたどり

虎杖をドングエと言って、若いうちは柔くて塩をつけて生食出来るし、保存食の青漬に採っておく家もあるが、これもおもちや笛で遊べる。笛や芦の若葉をクルクル巻きにして継ぎ足すと、角笛が出来る。椿を初め青樹の若葉を唇に当てて上手に吹けば素晴らしい草笛である。小鳥の卵のような形をしている雀太師は蛾の抜け口で、口に当てて吹けば、これまたいい音を出す。

二枚貝の貝殻を合せ、蝶づがいのを砥石で摺って作る貝笛もいい。お祭りの時に蛤の貝殻に詰めた薄荷糖を買い求めるのは、その甘味にひかれるばかりでなく、飴をなめあげたら貝笛にしたいからでもある。竹笛もおもちやとしての音色なら子ども手作りでも充分である。指笛、手笛は却々の熟練もので、誰にでも出来るという技ではない。子供の時から修練で、それがうまく出来ると大人になっても特技として大威張出来る場合は何度もあるものだ。

生後幾月も経たないおぼこが何を夢みたか、ほのかな笑顔をのぞかせることが

ある。それがイナワライと言って、「母胎にある時に栄養の充分な子ほど早くから笑うものだ。大きくなったら愛嬌者になる」と、年寄は喜び、まわりの者は何とかして笑わせようとご機嫌をとって、頬に触ったり、くすぐったそうな所をコチョコチョ突ついてみたくなる。それがだんだんに物心がついてくると、おぼこのあやし方もペットに芸を仕込むように手がこんでくる。

へ 頭テンテン ちよちちよち アワワ

とどめとどめ けえぐりけえぐり スペーン

子守がおぼこの両手に手を貸して、「頭テンテン」で拍手、「アワワ」でその手で口をおさえて声を千切り、「とどめとどめ」は一方の手のひらを他方の指で突つく。「けえぐりけえぐり」は両手を車の翼をまわすような形に回転させ、「スペン」でその手を伸上げて、万才のポーズをとる。歌の調子と変化にとんだ仕草でおぼこは大喜び、人によつては斯うも歌う。

へちよち へちよち や とどめ へちよち

けえんぐり けえんぐり や

ぼほーち 〱 シツチ 〱 ベーン

へちよち 〱 〱 や おぼこし 〱 〱

けえんぐり 〱 〱 とつどのめ 〱 〱

ちよきばき ポエン

次の唄は子守が百面相を作つて、ぐずるおぼこの機嫌をとり結ぶ。

へ あんがり眼 下なり眼

ぐるつとまわつて ちやこの眼

左右の人差指で両の眼尻をおさえ、唄にあわせて上げたり下げたりして、やがて指の先を使つてくるくると廻して眼尻を寄せて面相を変える。「チャコの眼」で「ニヤオン」と猫の鳴き真似をして顔を突き出す。おぼこが成育おがて自分の手でそれが出来るようになると、二人向き合つて笑わせっこなどして遊ぶようになる。

へ あんぐり (口) すっくり (鼻)

くりくり (眼) 毛シ虫 (眉)

栗の木林の（頭） 茸（耳朶）

歌に合わせ指先で軽くおぼこの顔を撫でさすってあやすが、ややテクニクの
こんだのになると、

へ松原通って（頭部の頂きにある旋毛あたりに指先を当て、だんだんそれを
顔の方に下げてくる）

おう広通って（額を撫つける）

ままこを通って（両方の眼縁を撫る ままこは幼児語の眼）

びった橋渡って（鼻峯を撫で伝ってくる。びったは低いの意味のペツタン
コ）

大池さ落ちだ。（口の周りを撫でまわしてから口を突つく）

ーんめえこ（菓子）などを指にはさんでおき、唄の最後に「落ちだ」で、
口の中に放り込んでやると、おぼこは一そう機嫌である。

へお乳ボンボン（子守は自分の乳のふくらみに二拍子で軽く手をあて、ボ
ンボンで更に肘を交互に打つ）チョチチョチ（拍子三つ） アワワ（両

方の手のひらを交互に口を塞ぐように唇にあてる

頭テンテン（手を頭に交互三回）おわくぐり（肘を曲げた腕を使って、前面でかえぐりかえぐりを三回）

アラきったがやーでば（両手を膝の上にして肩を張っていからせる）カンブカンブ（頭を左右に揺り動かす）

新し摺臼で 挽き按配がいい

囃むやら 落ちるやら ゴーンゴン

（新し摺臼からおぼこの両手を掴えとつて、摺臼挽きをまねて、体を回転させる気持で前後左右に揺ぶる）

このあやし唄は昔はやり節調であるから、子守自身も自分の唄として愛唱したかもしれない。

へあげえけんこ履がしよ

チヨコチヨコあゆべ 此処までござ

「美しい下駄を履がして上げるから、此処まで上手に歩いてお出で」という意味で、一足二足歩を運ぶ歩き初めのおぼこを励す唄であるが「眼がぐし鬼こ」遊びなどでも、鬼になった子のからかい唄にもされる。

へ猫はぢよぢよ履いで 杖ついで

緋の前垂 ちよなくなく

子守娘は側にいる猫の前脚を掴んでもちやすびにして猫踊りをさせると、おぼこは大喜び。ぢよぢよは草履とか履物の幼語。

おぼこは授乳の後もなかなか母のふところを恋しがって子守の手に渡されるのを洩ると、子守はおぼこの両腕を掴えてこの唄であやす。ご機嫌になったところをくるりとかわして自分の背に素早く移しておんぶをするのである。

指遊びは何の道具も要らない。場所もとらない。炬燵や炉端で独り遊びをするにもよい。おぼこの紅葉のような手を使つてあやすのにいい。

へ薬屋の前で 子供達喧嘩する

なかなか止めなえ 人達 見でる

親達心配する。

へ子供ど子供ど 喧嘩して

薬屋さんともめでも ながながきかねえ

人さん笑う 親達ごしやぐ

子供というのは小指のことで、薬屋は薬指、なかなかは中指、人達は人差指、親達は親指のこと。初め両手を合わせ、歌の進むにつれて該当の指を開く。或は逆に唄の指から起こし合せて行き、終いに拝む形になる。

へ長助 長次郎

酒がええが 餅アええが

田楽豆腐で 酒三杯

あやし唄で、両手使つて一句一句交互に握ったり、開いたりして、まわりの見る眼を眩惑させて喜ばせる。即ち片方の手を開いたら前方に突出す。もう片方は

人差指を出して、握り開いた手を追いかけるようにさし向ける。それを間違わずに歌の一句毎に指し替えて行くのであって、歌が興にのつて早調子となつても間違えないのが上手。

へ湯さ入りごんぜ

—— 熱ッが 温ぬるいが ぬるいば火焚ぐ

熱ッげりや んんめるめるる（うめる）

両手の甲を重ねたら、小指同志を組ませ、次に薬指、中指二本ずつを揃えて井桁に組む。下になった手の人差指を上方にくぐし上げ、上方の手の親指、人差指と三本を三脚にしたところでお風呂が上来あがる。「湯さ入り、ごんぜ」と誘われたら、三本指の間にどの指か一本をさし込む。

指の絞めつけがゆるかったら、唄の間に「ぬるい」と答える。すると、「火を焚こう」と次第に指先に力をこめ、あげくは爪を立てるほどに締めつける。若し痛さに耐えられなく「熱い」とこぼすと、「…ならんめる」といって、たっぺ（唾）

をかけられるから、素早く「あがる」と宣言して指を抜きとらないと痛い目にあう。唄につりこまれず「いいあんべえだ」と、長湯した方が得かもしれない。

へどの指かぐした……高々指どれだ

片方の手の指を寄せ、もう一方の手で握りかくす。ただ指先が少しのぞきみられる程度にすかす。どの指か一本だけ引っこめてそれが外から見えないようにしておいて、それを当てさせる。或はどの指が中指かを言いあてさせたところで握りを解いて当否を確かめる。

指はそれぞれ細い太いがあつて特徴があるが、甲高い指を低くみせたりしてうまくカモフラージュする。子供の指は柔いので固く握ると意外に判らなくて当てっこは興味深い。

爺さの職場は、冬場ふゆばは囲炉裏端、火つたりじりである。そこへ童子達が雪にとじこめられて、火が恋しくなると寄ってくる。爺さまは一躍火の番と子守役で

大役がかぶさる。あわえには膝の上におぼこをとらされる。子供誕生の際には麻の葉柄の産衣を着せて爺さまに抱き初めしてもらうのが、この地の仕来りであるから、これとて不似合な図ではない。

大体、爺さまが童子達の相手になつてくれる遊びといえは「木片叩き」とか「だえつ小僧」とか。一見荒っぽそうな遊びである。それでも爺さまに童子をあづけるのは、多少乱暴のようでも強い子に育つて欲しいと願うからであらうか。ゲームなどやって負けた罰を与えるのでも、爺さまは大仰にも大きな拳骨をふりかざし、息を吹きかけるやら、いかにも動作が大きい。でもそれは威すだけで、本当は加減してくれるので、童子たちはおびえず却つて大喜びである。

へ 昔々の宝釜

小僧小僧 痛えッ小僧 そつと磨げ

オッスコスコッ：スコセ

先づ拳で負けた者が炉端のあてぎ（炉ぶち）とか、板敷を直じかに下敷にして握つた自分の拳をのせる。勝者がそれを拳でもつて叩く権利がある。拳が接触する直

前に、叩かれる手を引いて外してもよいから、叩き損ったら仕掛けた方が痛い目にあう。歌につれ、「スッコ、スッコ」でタイミングを計って「セ」で打ち下ろして叩く。

簡単にへ小僧小僧痛え、小僧、そつと磨け——と歌つてもやるが、この叩きつくらを「だえっこぞ」というのは「痛え小僧」が詰った訛ったもの。本来は文福茶釜に化した狸が寺の小僧に力まかせに磨かれては痛いので、「お手やわらかに、やってくれ」と頼んだということから出た詞なので、大人の酒席でよく演じられるこっけいな舞の「文福茶釜」である。

へ昔々の文福茶釜 文福茶釜

あつ小僧小僧 そつと磨げ

磨けば光る その釜を

月夜に釜なんか ごめんだ ごめんだ

耳もちよいと出て 尻尾も出て

毛も生えたのハアこそこそ逃げたわいノー

「木片叩き」は二人対峙して片手ずつ出し合い、五センチほどの間隙をおいて重ねる。手が下前に位した者が隙をねらって、素早くしっぺ返しに上前におく手を叩きつける。しっぺ返しだから相手の甲を甲の方で叩くから痛さがちがう。叩かれないように瞬間手をひいて相手の失敗を誘ってもよい。勿論失敗すれば交替。拳骨遊びに、落雷になぞった「ゴロゴロ、ストン」もある。

へ天にピカリ　ゴロゴロ　ゴロゴロ　ストン

ストンで叩くのであるが、予告の雷鳴ゴロゴロは幾度も繰返して相手のタイミングを狂わせるところに駆引がある。空叩きの場合は交替。三人でも四人でも一緒になって拳を重ねた上に雷を落しても面白い。

やがて、おとなしく遊んだ駄賃に、「仲良ぐ分ける」といって、何か出たとする。爺さまへの分配が抜けたりとすると、爺さまはからかつて、「こんこもらい」をする。

へこんこもらい　こんこもらい　呉んなえじゅど

頭さ瘤こ十八出ろ　十八出ろ

分配の食残しが少なくなつてくると、こんどは遊びをかえて、「どの手さ握たが」――当てたら上げようとなる。それをうけて右か左かの神頼み。

へ餅ええが 酒ええが

婆々サの言う通り

おぼこは概して祖母さんめごが多い。こんなことにまで祖母さんは信頼をおかれる。

やがて囲炉裏の温もりで、気持よくうとうとするおぼこも出る。そんな時爺さまが歌つてくれる子守唄は「雀コ雀コ」ときまつている。爺さまの子守はとかく荒っぽい中にこれは珍しい。里雀に夢を託して百姓の道を語り聴かすのかもしれない。

へ雀コ雀コ 何アしてかたがるや（身を傾ける）

つぼこ（餌）食だくて かたがるや

つぼこ食だけりや 田作れ

田作っど 足こ汚れる

足こ汚ったら 沢こで洗えや

沢こで洗うど 流れるや

流ったら 葭よしの葉さたんぐづけ（すがれ）

たんぐづぐど 手ッ切れる

手切ったら 油こつけで寝ろや

寝つと 蚤ア喰う

喰うごんだら 喰つ潰せ

喰つつぶすと 苦ンげえ

苦ンげえごんだら お湯吞め

お湯吞むど 小ン便ア出る

小ン便ア出っこんだら たつで来い

おそらとおてんき唄

○ 雲 々

○ 雲 々

へ 雲々 寄んな

お天道さま あたれ

日向ぼつこの最中に、流れ雲に暖い太陽をさえぎられては大きな迷惑である。ましてや影帽子踏みに興じている時などなら、一時休戦も止むを得なくなる。早くお天道さま出て来て呉れと祈るばかり。子ども達は太陽であれ、お月さまであれ、手の届くよな親しみで呼びかける。唄は夢を近づけて呉れるのだらう。

○ お天道さま

へお天道さま 頭の上 came

番木叩げや 昼飯だ ひるま 昼飯だ

夏の太陽は高い。お昼時分になると頭の真上に上って、地上に映った自分の影帽子に立ったままで足がかけられ踏みつけられる。大人でも田の草を除いて、水鏡に映った影帽子の頭が眼下に映るようだともうお昼と読むという。子ども達もお腹を空かして昼飯おひるをはたる（催促）。番木は昔の時報である。

○ お月さま

へあどさま なんぼ

十三 七つ

まだ年あ若えな 若えな

婆ンばさ んンばて

あげえかつか かけて

丹波の国さ お茶のみござれ 〵

あどさまはお月さまを指す。ありがたいとか尊い方を意味して、仏事で見えられたお坊さまなどもあどさまと呼んでいる。

お婆さんにおんぶした上から、子供のきれいな着物に手を通さず、だらりと羽織つてというから、一張羅の他所行き姿である。お茶のみに遊び行ってお出でと呼びかける。するとお月さまも心なしかこちらに近寄ってくる気がする。よくお風呂上りの幼子をあやし、夢を与える子守唄でもあった。

また豆名月や栗名月の時にも名月をたたえてよく口にされ、影帽子踏み遊び唄としてもてはやされたものである。

○ お日さまへやみ

へお陽さま へやみだ

風の三郎 あまめだ

風々 遠う吹け 遠う吹け

山国の子達は通学距離の遠い子等が多いから、集団登校が常習である。上級の子が先頭と後尾に着いて、中間に小さい子達をはさんでしっかり守つての道中で、殊に冬期鳥海嵐が猛吹雪をともなつた時は始末におえない。吹きつさらしの雪道は人間の足跡ばかりが踏み固まつてうずたかく、まわりは吹きはらわれて「吹雪路は裸馬の背を渡るようだ」とされた。小さい子など軽く飛ばされそうになり、それに降りしきる雪で一米先の見とおしも効かない。こんな時、先達を見失わないよう、落ちこぼれ出ぬようにと元気づけにみんなでこれを歌う。

即ち、お日さまは怠惰で、風の神は勤勉者だ、風の神よ、頼むから遠くに行つて吹いて呉れと言うので、太陽をけなしつけて怒らせ、奮起させようという魂胆

なのである。

○ 風 あげの唄

へ 風の三郎あ　へやみだ

お日さま　まめだ

カラカラ風　吹け吹け

風上げをして遊んでいると風が淀んでもっと吹いて欲しいという時には、お日さまの唄と反対に、風の神を怒らせて風を呼ぶ。

晩秋、神社や寺院などの庭で遊ぶ子ども達が銀杏の落葉などが小さな龍巻で舞うのを発見すると戯れて追いかける。そんな時によく歌われた。

○七夕さま

へ 天の川 頭の上 came

新米喰えンぞ



青い澄み渡った天空に白いお米を流したようにも見える天の川が、ちょうど頭上に仰ぎ見ることが出来れば、もう新米も食べられるようになるんだと、お年寄は経験を伝える。秋長を心配した昔の米作りでは、唄は童達の喜びよりか、大人の安堵から出るのかも知れない。きれいな星空は明日上天気とも。

○流れ星

へ 流れ星 流れ星

俺あ願い叶えて呉ろ



流れ星の落ちた家には赤シ坊が出来るとか、或は流星を発見して、それが消えぬ間に願いごとを頼めば叶えてもらえるという。発見して、「あつ飛んだ」と、星を指するのが一瞬であつて、大方唄は発見の余韻として楽しい夢を残そう。

○ 童は風の子

へわあらしや かーぜの子つ

爺タイ婆々ア 火の子つ

童ア風の子 爺々婆々火の子

こたつに縮こまつて、お年寄の昔話に聴きはれていた童達も飽きが来ると、布団を引っぱりっこしたり、中にもぐり込んだりする。小さないさかいが始まると、お年寄には「童ア風の子」だ、少しおにや（屋外）で遊んで来なさいとたしなめられる。すると口さがない子が「年寄あ火の子」とへんか（口答え）して、こた

つをとび出して行く者もいる。幸い吹雪も淀んだようである。

年寄とのこのやりとりが単純な童詞のようであっても、二人三人と声を合わせると、快いリズム感が出て、やがて友達を吹き寄せる唄ともなる。

家の中に縮こまつてるんじゃない、子どもは寒さに元気な風の子だい。みんな出ておいで——家の周りを雪囲そがきと積雪におおいふさがれているので、ちつとやつとさつと名前を呼んだぐらいではきこえそうもない。唄はすきま風にのつて家中までとびこむ、どんな呼び出しにもまさる吹き寄せであろう。

○ 虹 た っ た

へ・の・じ・立・つ・た 燃えたつた

べ・ご・こ・も・渡・れ・や 角こも渡れ

さあつとかだち（村雨）の通り過ぎた後は、空は洗われたように澄み、遠くの

山々の木々の葉も透けて見える。そんな空に雄大な虹の大橋がかかる、美しい七色の像は子どもの夢をひろげることだろう。

虹の根方には昔話のように宝物の入ったカメが埋めてあるのだろうか。しかし虹の根ツこは追ッかけるものではない。後で帰って来れなくなる。といつて、「虹の根っこ探すな、道案内（ハンミョウ）の後追かけんな」と諭めている。

虹のたもとは直ぐ近くの森にあるように見えても、実際は行っても行っても切りのない夢の国。それを探ぐったら謎路をたどるようなもので、迷子になるのは知れたこと。

それと似てだまされ易いのがハンミョウで、蒜の花時に葉裏に産卵する毒を持つという昆虫。人が歩いていると行く先々にふわりとおりて色のきれいな翅を休めて注目をひく習性があるところから道案内という俗称もある。捕えようとすると機敏に飛び立ってどの方向に跳ねるか予測もつかない。これを追いかけたら道案内どころか、家に帰る方向も失くしてしまう。それと毒なところから相手になるな、手を出すなと諭したのだろう。

お天氣の好い日に水浴びして、カンカン照りの太陽を背に水しぶきをかけると虹が映る。この手作りの虹遊びの時にもよく口にされる唄である。

○ 天 氣 雨

へあめの中から

金太さんと銀太さんが 見えるよ

田圃一枚へだてて向うが照りでこちらが雨降りという。気ままな日照り雨に出あうことがある。そんなのを「狐の嫁入り」といつている。外遊びしていた幼い子が軒下に暫し雨宿りしながら、紅葉のような手のひらに雨だれをうけながら晴れ上がるのを祈る。

日照り雨であるから、雨ざしは大人の表現ならば金糸銀糸だろうが、童達なら金太さん銀太さんとうたって可笑しくない。でもこの唄は昔江戸の飴売りの囃唄

だったという。そのような飴を食べたことも見たこともない山の子達が歌い継いで来ているのは、恐らくお先祖達にお伊勢詣りの時にでも小耳にはさんで来て土産にした人がいたからかもしれない。

江戸の小話に、お伊勢詣りに行った表屋の衆の土産話に、数河峠の茶屋で結構な銘物飴を売ってるが、食べたかと聞かれたのに、雨が降ってましたと答えたという話が伝わるから、これは唄の小話といえよう。それでも飴が雨となつてうたい継いで長い年月も経てば、もう借り物の感じはしなくなった。

○ か だ ち 雨

へ雨バーラ バーラ やんさど晴れる

雨バーラ バーラ

子供は天成の詩人、家路の道すがら雨にたたかれ、空をながめていろいろ想い

をはせる。やんさどとは大いにとか、沢山にとかの意であるから、「バラバラ降って来た大粒の雨も早く上がって一杯に晴れ渡れ」という。矢沢は部落名で矢張りヤンサと呼んでいる。「北方、川上から降り出した雨ならば矢沢でとまって、こちらまで降って来るな」と、言葉少なだが、雨の降り止むのを祈るのである。

○ 雨 傘

へ 雨バラバラ降って来た

まえかた

前方ぬれる 傘傾かたげろ

でつちり

出尻ぬれる 後方うつしよき起せ

でんび

出額でんびかつかぬれる

道路の近くに若い桐畑でもあつて、下枝に子どもの手でも届くようだと大きな葉を掻きとる。それを傘代りにかざして雨の吹きこみを僻ける。てつつぶり（裸

頭）をかくしただけでも気がすむのだろう。そんな時の囃唄でも。また傘をさしての戯れ唄でもある。

○　じ　が　割　り

へ　鏡なた　鏡なた

山のかんげ　見える

東京見える　東京見える

神楽舞が門付にやって来ると、霜が降る——ちようど霜月で寒さも酷くなり、田圃や苗代の水溜には薄氷が張る。子ども達は稲株に足を載せ、失敗しても深く沈まないようにと渉り歩く。風船でも割るような、パチンパチンという心よい音を立てて氷の割れるのが楽しい。

また透きとおるような氷の板を持ち抱えて、大きな眼鏡だといって喜ぶ。これ

を透せば山の彼方、遠く東京までもまる見えと夢を拵げて囃立てる。

○ 霰 こ

へ 大寒 小寒

山がアラレコ飛んで来た

お山さ雪が三ど降ったら境山に、さげふやまほして境山三度降ったらこんど里さ来る —
お山は鳥海山のことで、境山は北方秋田県境丁字岳、西方は庄内境の弁慶岳のことである。

近々里にも白いものが来ようかという頃、萱刈作業で山に稼ぎに行った人達が「今日、山は霰で手ですくうくらい白ぐなつたつけ」と、山の土産にしたいくらいだったと冬の初便りを持ち込む。

霰は雪の前触れとして子ども達は犬ころのように喜ぶ。どんぶくの袖に手を通

したまま、すつぽりかぶるようにずり上げて、後首と耳をかくして神楽舞のよう
にしておかけめぐる。ふくれこ餅をあられことも言っているから、なじみ深い言葉。

○ 初 霰

へ初あられこ 眼の薬

俺ア眼まなく 良ぐして呉ろ 良ぐして呉ろ

初霰が降って来ると、童達は元気に屋外に出て、口を大きく開いて顔に真向に
受けるようにする。まるで雹のような大粒を風にたたきつけられると、まともで
は痛くてたまらない。大きな木の葉や乾いた雪そがき囲に溜ったのをしゃくり、「俺あ眼、
良ぐして呉ろ」と唱えて眼をこする。こうすると冬も晩くなつて「ゆきめ」を患
うことなくすむという呪でもある。

○ 初 雪

へ 雪コンコン 降つて来え

向えのやんま 見^めなぐなれ 見なぐなれ

鉛色の空からはとうとう雪を散らす。沢山降ってくれたら雪ダルマも作れる。
早く本格的な雪遊びがしたい。向いの山の峯々が見えなくなるまで降って欲しい
と祈り願うのである。

しかも大声張り上げないと、せつかくの雪も晴れ上がってしまい、雪ダルマも
作れなくなるよと、大きい子にけしかけられ、我負けじと大声を和して叫んだも
のである。

○ 綿 雪

へ ボタ雪 綿雪

上見れば虫こ 中見れば綿こ

下見れば雪こ

さらさらと窓に当る玉雪や、戸の隙間から吹き込む粉雪などと異つて、ぼたぼたと降る湿り気多いボタ雪、ふわふわと音もなく積るような綿雪は大型でまるで生き物みたいに天から舞い降りて来る。その降りっぷりに見とれてみると、何かめまえたい（眩暈）感じで、遠く近く動く様子は掃きたてのお蚕にみえたり綿片に感じられたりする。でも静止すれば矢張り冷たい雪にちがいない。

○ 雪 の 焼 附

へバツコやバツコ

馬で一ダンニダン それツ三ダン

新雪を下駄で踏むと二の字二の字の齒跡が残る。下駄の齒に附いた雪がとれな
いと高齒をつつかけたようになる。雪がこのように焼けついてくつつくのをバツ
コといって、雪質にもよるが、櫓でもスキーでもバツコが附いたら大変な難儀で
迷惑も至極である。

下駄を履いたまま足の先に力を入れて、でも拔げないよう、器用に雪だけを蹴
りとばす。バツコは雪の上をコロコロと転る。

その雪塊が馬で何駄も積むような大物になれと唱える単純な遊びであるが、こ
れが童達の雪との馴れそめの遊びで、やがて根雪となり、甚兵や藁靴を履くよう
になると、本格的な雪の遊びが拓ける。

○ 履物 占い

へ 履物 伏ひさんな

明日 あした 天気になあれ

子ども達が夕暮に遊び終えて家路につく時、履いた履物を片方抜いで高く放り上げて、明日の天気を占う。地上に落ちてもし裏返しに伏さったら雨が降り、表が出たら天気良しと判じるのである。お天気は明日の遊びにおおいにかかわりをもつので、子ども達も気にして夜上がりする。

○ 鳥 々

へ からすからす 西山火事だ
んが・(汝) 家 焼げんぞ

早く行て 水かげろ

急がねど 丸焼げだ

ねぐらに帰る鳥の様子に、明日のお天気をかけて歌いはやす。若しも西の夕空が赤く焼ければ、明日は上天気と知って、子ども達の鳥を送る声援もはずみがある。

○ 上 が り 鳥

へからす からす

やんささ行て 晴らせ晴らせ

鳥が大沢川の上流に向って夜上がりするようだと、明日は天気が良くて、下流にねぐらをとるようだと荒れるという。

やんさは矢ノ沢（地名）で、川上に夜上がりして明日はお天気にしておくれと

の願いをひそめ、またやんさは沢山とか大いにとかの意味の方言でもある。

○ 鳥 勘 三 郎

へかーらす 勘三郎

風吹いたら飛び上がれ

弓ええが 鉄砲ええが ズドン

地上ではそれほど感じなくても、中空で相当強い風が吹いていることがある。空を飛ぶ鳥の群がそんな層に捲きこまれると、煽られて群を乱し、にわかな騒ぎを起して、まるで鉄砲で撃たれたみたいになる。こんなまきがらすは風のしらせでもある。

○　へちへち来たぞ

へちへち来たぞ　雪降ンね

へちへち来たぞ　春来ンぞ

へちへちはこちどり、その鳴き音からそう呼ぶ。春彼岸も近づくとき氷雪で塞れた大地も川筋からゆるんで来る。春もこちどりと共に川をのぼって山国を訪ねるものかも。

仏曉に、それこそ夢幻の中にこちどりの甲高い声を耳にするようになったら春もすぐそこまで。春眠曉を覚えず——か。大人も「へちへち来たぜは、糸うみでがせ」などといっている。やがて春を一番に告げたこちどりの晩秋には川を下って南へ帰る。その時は、

へちへち下るど　雪が来る

と。

○ 鳶

へ 鳶だか 鷹だか

鯨一本呉っさげ まわれまわれ

鳶が里に来て舞うようになったら、もう雪は降らない——と。のどかに円を描いて舞うのを童達が指差して呼びかける。それが通じないでか、鳶は相手にされないふうだと、すぐ悪態唄となる。

へ 鳶あ お山の鐘たたき

一日たたいて 米五合

鳶はお山の乞食坊主だ。一日中托鉢してまわってもお米が五合も貰えまいと野次る。

鳶が悠々と天空を舞う時は天気鳶で、明日は上天気である。低空をバホバホ羽ばたきをみせて飛ぶよな時は荒れ鳶。しかも川のほとりに下り立ってかながれ（流水）などに止ってしよびたれた（やつれた）姿をさらしてる時などは洪水の怖れ

があると思う。

○ つ ば く ら

へッンッン つばくら
鯨舟かじふねさのつて来た

日本が暖くなる頃に東南アジアから姿をみせる春一番の鳥だから、北洋で捕れる鯨かどと同船する筈はない。でも生鯨は春告魚といわれ、燕が姿をみせる頃を同じくして、しかも大衆賄魚として、どんな家庭でも箱で買い込み、田植賄、正月肴の仕度をしたものであるが、こども達には燕と鯨は或は同船かと思ひこんだのであろう。あまり苗で束を作り、空高く放り上げて、この唄で燕に呼びかけても遊ぶ。

燕の渡来の早い年は温暖で豊作、またその帰りの早い年は雪が早く来ると言い

伝える。渡来の一日でも早いのは大歓迎で、初めて姿をみせた日にはお・て・かけ（御
餞米）といつて一升枺に白米を入れ、付木一連と松の葉を添えて燕が巢を営む近
くの高窓に供えて迎える習いがあった。

○ 梟

へッポー 糊つけ干せ

梟の鳴き声をもじつて歌う。梟は大昔には染屋が商売であつたので、お天氣が
氣になつてそう歌うので、若し「糊つけ干ーせ」と聴こえたら、翌日は晴天であ
る。歌の終いが「干せ」に到らないで「ほー」で切れるような時は雨降りと判ず
る。「檻樓着て奉公」と聴いても雨天であるといつた。

よく梟が家の中に飛び込んでくることがある。福が舞い込んだ兆だといつて喜
ばれるが、ふくろうのふくが福にもじつての話。実は家鼠が屋根裏から屋上に出

て姿をちらつかせたのを発見して追いかけて、屋根の煙出し穴から屋内に迷いこんで出口を見失つてしまい、人間に掴つてしまったという運命だったのである。

○ 山 雀

へ ツー ツー ペン ツー ツー ペン

ゲン シチ 来 た さ げ 雨 降 る 雨 降 る

ゲンシチは山雀の方言。初秋に奥山が荒れると、山雀は里に出て来て、高い樹の枝から枝へわたって、ツー ツー ペンとさえずる。キーでも打つような歯切れのよい鳴きである。ツー ツー ペンは雨降りの先触れである。

山雀を飼鳥にして愛玩するには、そのツー ツー ペンの繰返しが多いのを歌上手として選ぶ。また宙返りの達人であるから、そうしたのを選んで釣瓶上げなどの芸も仕込む。山雀はイナゴが出る頃掴えると、荒鳥の餌づけもじょう・さ・ない（容

易とされた。

○ 百 舌

へ百舌の高鳴き 上天気

これは晩秋にみる景である。その頃四十雀が里に來ると雪が降るといった。奥山が荒れると四十雀が群れて移動する。そこを百舌に襲われて逃げ場を失くして、よく人家に逃げ込む。でも四十雀は始終空に通じ縁起でないとして、飼おうと掴えたら、家の人に叱られたという話をきく。

○ みそさざい

へチャツチャギ チュン チュン チュン

ぐるわ三度まわたら 雪^{そがき}囲しろ

吐く息も真白く、鼻の下に氷つこうという冷えの朝に、みそさざいは里に来る。

チャツチャギは方言。

チュン チュン チュンと、三度続けてさえずつたら雪がつく——とも言い、こまわりきかして屋根の周辺を飛びわたる姿は、いかにもそ^そが^がき^きを早くしなさいと促しているみたい。冷えの鳥。

○ 猫

飼猫のたちいふるまいでよく天氣を占う。猫が炉端や炬燵の上で脚を投げ出し

て伸々と寝転んでいたらお天気。それが訳もなく騒ぎまわるようならば天気は荒れ模様で、また猫が顔を洗う仕種をする時は天気下り坂と判ずる。

よく無精者が顔を洗うみたいというか、猫が掌をなめて眼糞を落すかのように顔をこする。その手つきが耳越しに頭頂から傍にかけてこすりおろすようであると、お天気はよくなると占う。そこで、

へ ちやこ ちやこ 耳越せ 耳越せ

猫を膝に抱いて、両手で前脚をとって猫の耳越しに顔を撫でつけてやれば上天気疑いなし——これは愛猫家のテルテル坊主。

○ 馬 こ

へ 馬こ 馬こ

大豆^{まめ}一升 呉^けっさげ

腹太鼓打て

春駒いななけば上天氣——というし、牝馬が逸物をだらりと垂れたのに蠅が群るのを追払うのに、軽く腹鼓を打つ。その所作を天真爛漫に冷やかす。こんな様子をみるような時は好天が続くといったもの。

○ 狐

へ 狐の困快 馬の止動

野狐の鳴声がコンコンと聴える時は快晴で、クワイクワイと、まるで物を引き裂くような声を出す時は荒れる兆という。つまりこの鳴き声を文字で現わせば、コンコンは困々、クワイクワイは快々で、およそ天気現象とは反対である

馬をひき歩かせる時、始動を命ずるのに「シイ」と声をかけ、実際の停止は「止」ではなく、反対に「ドウ」つまり「動」であるから、逆さ詞となる。とにかく、

野狐の鳴き声でお天気を判じたくらいであるから、昔は狐も人間のずっと近間に棲んでいたことになる。

○ 蜉 蝋

へ 上ンがり 下ンがり

ちよことり ちよことり

下て来い 下て来い

カゲロウが群れて円筒形に舞うのをみかけると、明日は上天気。密集してこんがらがりもしないで、上下する様はちよことり（曲芸）である。よく蜘蛛の巣で小さな手綱を作って捕えたものである。この蜘蛛が夕暮、軒先に巣を張ったら翌日は上天気といったが、この蜘蛛は喧嘩蜘蛛には一番強いとされた。

○ 青 蛙 と 蛇

へ 青蛙 びつせ 家さ入つと 雨あ降る

蛇のお経 百日照る

青蛙は雨を呼び、家の中に入つて来るときつと雨降り天気となる。

また反対に蛇が家に入り、出口を失つて障子に触れてブンブンお経をあげるよ
うな音を立てたら、当分は照りが続くところから、子供達は発見するとそ
う囃す。

○ 蛇

へ 蛇の木登り 大水の前兆 しらせ

蛇の道切り 日照りのしるし

蛇が高い木の上上がつてると長雨が続き、洪水の怖れがないともしない。またよく乾いた路上を横断して移動するのを見かけたら日照りが続くと、大人はいましめ戒める。子ども達も小耳にはさめば口調子がよいので自分たちのものとして来た。

○ 五 寸 バ ッ ケ

「五寸バツケ」という天気占いは、草の茎や木の小枝など何でもよい。手近なところ路傍に生えてるオオバコの穂軸でも土筆でも、大体五、六センチ程度にもぎ取って、これを親指と人差指を使って指中で左右交互に挟んで計っていく。

へ 降 っ が 照 っ が



つまり花卉占いで、花卉をむしり取って行く、あの要領である。最後に指でかくれた所が「照っか」なら晴で、「降っか」が当たたら雨と占う。

露の苔をバツケと呼ぶが、こちらは八卦が訛ったのである。そして五寸バツケはお天気占いであり、またそれがどちらで止まるかを当てるあてっこ遊びでもある。

青梅や杏の未熟な実から核をとって掌の上にのせ

へ 降っが 照っが プスン

と唱えて押し潰す。プスンと齒切れのよい音を立てて核の中の液が飛び散れば、明日は晴天、若しもブスツと鈍い音でつぶれたら雨降りと占ったものである。

あとがき

『安楽城の伝承』三がガリ版になりました。編集・印刷の理由は（一）（二）集同様、研究調査者の便となればと考え、著者にお願ひして一本にまとめたものです。

佐藤翁は山形県最上郡真室川町安楽城の出身で、現在は東京におられますが、わらべ唄の発掘調査についてはすばらしいお仕事をなさいました。今後、も健筆を祈り上げ、この本を作らせていただいたお礼としました。（武田）

安楽城の伝承（三）

佐藤陸三さんの語り

昭和 60 年 10 月 15 日		
著者 佐藤 陸三		
編集・印刷	武 田	正
山形民話の会 山形県南陽市赤湯 3180-4 武田方		

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成十八年六月三十日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四